もあるまいかと、毎日〳〵一日づゝと存じて大事に致しましたが、只是のみ覺え居ますが此の外は皆々殘念のみにて候へば、親ある人々は跡にて殘念のなきやうに、今日を大切〳〵とよく事へ給へよ。私が此物語に申すは十一歳のむかしなれども、今母が茲に出で給ふて抱きしめられる心地でござりますと、疊の上に打臥して聲を放つてなげかれしに、我父初め此の座にありしもの一同に涙に袖を濡し、かゝるあり難き物語りの世にあるものかと、皆一同に此の孝子の誠が心底に徹しつらぬき、其の德の必ず隣ありて又各々方へも申す事でござりますが、何と〳〵あり難い物語りにて、此の孝子の此の母に今も分れるか、今も後も知れぬといふ處が面白い處にて、世の中に不忠がしたいの不孝がよいのと申すものはなけれども、愚かなものは主につかふるも親に事ふるも、一代の永き事なりと思ふ處より澤山に思ひ、又は心安だてにてつゐうか〳〵と暮す間に、主君父母におくれし後に悔むとも何んの甲斐のあるべき、人の命は今も知れぬ世のありさまを思ひ、只今を大事今のみなりと孝

心忠信をはげむべし。

今のみと思ひて父母に事へよや
後な頼みぞ知れぬ世の中

誠に知れぬ世の中なるかな、此の物語りを孝子に聞きしは、まだ此頃のやうに思ひ侍りしも早や幾年の秋を經て、あゝかなしきかな、語り給ひし孝子も終りて黄泉の客となり給ひぬ。是を尋ねて親しくも子弟を善に導びき給ひし、我が父も今過ぎ行き四十年に近くなん〳〵たり、かく各々方に語る此の翁もまた〳〵同じ世の中に誰かは殘るものはなけれども、天地とひとしく代々めでたく朽ちざるものは、人の誠なれば、虎は死して皮を殘し人は夕に死すとても、朝にきゝし道の德は不孤して、代々に人みな隣をなして末代までの鑑となるは、誠より明かなるものは、ござりませぬ。

あきらかなものは誠と知りながら

身に行はぬ人ぞくらやみ

各々方も殊の外の御感涙をなして聞き給ふは神妙にて是皆性善の徳なり。小徳の明らかなる處なれど、感ずる計りで身につとめ行はざる人はくらやみとなるべし。昔孔夫子魯の邊りに遊び給ひし時に一つの塚ありしかば、子路尋ねて何ん人の塚なりと、夫子の給ふ是郭行子の塚なり。子路また尋ねて郭行子は如何なる人ぞ、夫子の給ふ郭行子は善を善とし悪を悪とせし人なり、子路驚いて曰く善を善と知り悪を悪と知らば是善人なり。然るに何んが故に斯く滅び失せしは如何なることぞと問はれける時、夫子の給ふには此の郭行子は善を善と知れども其の善を用ひず、悪を悪と知れども其の悪をしりぞけず、故に亡びしとの給ひしとかや、世の中皆々此の郭行子にして善悪は分りても身に用ひ行ふことの難きによるなるべし。

夏の虫の身をいたづらになすことも

一つおもひによりてなりけり

世の人夏の虫の火に入るを見ては笑へども夏の虫は火を火と知らず、明らかなる處なりと思ふて火に入るとかや、又人は火は火、水は水、悪は悪、色と欲は身を亡し酒食は身を損じ短氣悋氣は身をこがし亡すと知りつゝ、其の火に飛び入りて終に其の身を亡すは皆放心のなす處なり。むかし話に或る寺の和尚放埒にて、或る夜女郎を買ひに行き、女郎と閨に入りしに此の女郎殊の外なる眠り好きにて前後を知らず寢入りしかば、和尚はいろ〳〵として起せども猶々深く寢入りて起きず、和尚腹を立てそばにありし髪剃をとりて、女郎の髪を少し剃れどもます〳〵つよく眠り入り少しも動かず、和尚大に怒りて遂にのこさず女郎が髪を剃落し、坊主となせしかば和尚大に驚き、ひそかに抜けて逃げかへりしも女郎は知らず、よく寢入りに寢入りたり、翌朝に至り目をさましあたりを見しが客の居らざるに驚き、和尚様何處へ、御客様何處へ坊さま何方に居給ふと、いろ〳〵探せど知れぬ故ます〳〵驚き和尚さま坊さま〳〵といふ拍子に不圖手にて我が頭を撫で、あゝ和尚さま此處にか、そん

なら私は何方に居ると申せしとかや、此の可笑しき話の如く色に放心しては我が身を忘れ、酒食に放心しては我が身を忘れ、怒り腹立ち悋氣嫉妬に放心しては我が身を忘れ、我が身を失ふ元はわづかの一念の迷ひ、禍福門なく自ら招く處にして道二つ、仁不仁のみ、善も惡も西へ行くも東へ行くも元はわづかのふみ出しやうの一念なり。同じ其の身を忘るゝも、忠臣は主君の爲めに其の身を忘れ孝子は父母の爲めに其の身を忘れ、貞女は夫の爲めに其の身を忘れ、聖主は民の爲めに御身を忘れ給ひ、賢者は義の爲めに其の身を忘れ佛菩薩は衆生の爲めに其の身を忘れ給ふなり。同じ其の身を忘るゝにも誠を以つて身を忘るれば是れ善なり德なり。又私心を以て身を忘れば是惡なり不義なり。善は榮え德は福なり惡は衰へ不義は貧なり。

世の人の心ぞ打出の小槌かな
福を出さふと貧を出さふと

貧福苦樂盛衰死生も只一念のより所にて、朱に交はれば赤くなり墨にそまれば黑くなる、滄浪の水濁れば人來りて足をあらひ水清ければ人來りて纓をあらふ、我れ賢なれば賢者來りて我を玉にし、我に誠の心德あれば何んぞ孤ならん必ず隣ありて賢者あつまり我が德をたすく、我又人の德を助けてとも〴〵に明かなり。

水車みづから臼のみづからは
することも知らで米やしらげん

世にはよき人に近より、善き友の力たすけ得るほどの大いなる德はあらじ、文を以て友を會し、仁を以て友を輔くと、かゝる御仁惠の御役所の廣大無量の御仁德の不孤して萬民ゆたかに御互にありがたき儒佛神の道の片はしを、かたるも聞くも皆々恐れながら泰平の御代御恩澤萬々歲沐德の御光輝なりと御冥加を仰ぎ奉る。かゝる時に生れ出しも偏に天地神儒佛の御加護全く御代の御仁惠主君先祖父母の餘光なりと重疊ありがたく〳〵も思ひ奉る。此の五つの御恩冥加を寢ても覺めても片時も忘れず、毎日三度々々の食事の節膳に向ひて箸を取りあげ給ふ時に、食より先へ此の

五つの御恩をあぢはひて

はしとらば天地御代の御恵み

主人や父母の御恩あぢはゐ

と此の道歌をとなへあぢはひ、身を慎むの誠あれば此の徳不孤して必ず子孫永く徳に隣りして榮ゆるなりと、思ひさとりて、あり難き御仁恵のくれ〴〵もあつきを思ひ奉るべき事なり。

御高札

一親子兄弟夫婦を始め諸親類に親しく、下人等に至るまで是をあはれむべし。主人ある輩は銘々其の奉公に精を出すべき事

一家業を専にし怠ることなく萬事其の分限にすぐべからざる事

一僞をなし無理をいひ惚じて人の害になるべきことをすべからざる事

一左の妙薬は常々怠らず之を用ふべし。家職繁榮して富貴長久の福運あること疑ひ

なし

壽命長久丸、一名貧乏一切根切藥

調合法

一(節儉十匁)二(忠孝五匁)三(正直十匁)四(慈悲五匁)五(勘忍五兩)六(信義五匁)七(思慮十匁)八(勉强十匁)右八味何れも以上の割合に調合し、分別の藥研にて能く細末にし、思案の篩にて能く振出し、自身の膏油を絞り其の汁液にて練合せ、寒暑共に强く製して用ゆべし。

効能

(燒石に水の如し)日限の急かるゝによし。年賦の滯りたるによし。節季のきりき り虫、てんてこ舞によし。書畫を見て胸の塞ぐによし。半かかり義理かかり等の差し込みによし。其の他貧乏一切根を切る事神の如し。

又右の妙藥を平生用ゆる時は失綜首締め身投等の頓病起る事なく季節を安樂に越ゆ

るの良藥なり、尙委しくは用ひて効能を知るべし。

毒だち

一、大酒　二、朝寢　三、夜遊　四、登樓　五、遊山　六、强慾　七、虛言　八、袁彥道

右の外遊藝及勝負事等は皆毒なり。

忠孝に家職せいだしかんにんを守る人をばまもるふく神。

多くの人の失敗を取り易き物

人は酒色を注意せざる時は失敗を招くことがあります。故に酒色は成るべく慎んで呑まず好まぬやうにするが第一であります。それに付けても色といふ上面の皮にはまりては世を渡らずに身を沈めける

といふ歌もあります。女と酒は誰でも嫌なものはありますまい。年寄つても其れが爲めに浮名を流すものもあります。彼の前宮内大臣です。宮内大臣ともあらう立派なお方が頭に雪を戴く高齡なるにも拘らず、難波津にまだ咲いたか咲かぬかといふ梅の花を手折りて、年甲斐もなく恥を社會へ晒らして遂に其の高位の官も退くことゝなりました。これと反對に彼の橋本雅邦さんは若い時分から女に好かれ、娘に惚れられて仕方がないとかで、或夜酒をうんと呑み其の勢ひで燒小手を眞赤に燒いて之を頰べたへ押付けて燒餅ほどのピンを拵へたのです。そうすると其のピンの爲めに御面相も以前と變つて醜くなり、不男になつたから惚れるものも隨つてなくなつた。茲で己れの名を社會へ擧げるときなりとて熱心に勉强したから其の効驗忽ち現はれて明治時代畫師の第一等

の月桂冠を戴いて天皇陛下、皇后陛下の仰せを得て宮内省の書も澤山書かれたのであります。又スペインの或る政治家も若い頃は娘に好かれ女に惚れられて困つたけれども、これは雅邦さんの如き荒療治はせず「我輩は既に國家と結婚せり〳〵」との一點張りで寄せ來る娘といふ娘を悉く肱鐵砲で打倒し、脇目も觸らず馬車馬的に勉強したから遂にスペイン第一の大政治家となり。其の身は竹帛に垂れ千載の下朽ちざるに至つたのであります。又支那に王陽明といふ人がありました。其の人は婚禮の日に何處かへ行つて歸りません。所で花嫁は最早や乘り込んで門に入り、家では一代のお目出度い御祝儀の晩だと朝から人を入れて御馳走を拵へ、酒を取つて來るやら肴を注文するやら、それは〳〵大騷ぎをして居るにも拘らず、大事の〳〵花聟さんが一向歸つて來ないので何うしたのか何處へ行つたのかと八方へ手分けして探しに出ると、やう〳〵其の夜も明け方の頃、奥の奥の深山大澤の洞穴の中で燈明を點けて一人の仙人と切りに本の議論を戰はして居つたのです。捜しに行つた方

が其の背中をポンと打つて婚禮の事を話すと、「己は女の事よりも此の人と話する方が餘程面白いから遂ひ婚禮の事は忘れて居たのだが今晩であつたか」といはれたとか。

此の王陽明も後には大層偉い人となつて陽明の學派といふ一派を開かれた。日本にも其の學問をする人が澤山ありまして東郷大將等も其の一人であります。故に誰でも此の人達の如き精神を以てする時は必ず開運も成功もしまして何に不自由不足なき身分となり名を千載の下に垂るゝやうに煥發しますが、若しその精神を持たず己れほど好かれるものはない。愛せらるゝものはないと己惚心を起して好い機嫌で巫山戯て注意せざるときは遂にこれ一生の失敗を來すの基となります。隨分世間には土藏倉の三つも四つもある家の息子さんが、女の色香に迷ふて先祖傳來の財産を棒に揮つて妻子の悲みは餘所の見る目も氣の毒なものもあります。其の他道ならぬ事をして赤恥を社會へ晒した者もあれば、よく〳〵愼むべきことであります。

鈍くても藝はなくても色黒くても
只働くをよき人と知れ
躾なく氣隨氣儘に育てたる
子供の親はいつも苦をする。

立身始末の秘訣

むかし或る田舍あるきしける者、山中に入つて仙人にあひ問ふて曰く「おのれは商人なればさのみ難かしきチンプンカンプンカンは習ふても益なし、手みじかく金をため壽命を延す術あらば敎へ給はれ」と申しければ仙人答へて曰く「金と壽命とを延ばさんと思はゞ始末をなすべし」と敎へけるにぞ彼の商人大いにあざ笑ひて曰く「始末をして金を

延ばさんことは三歳の小兒もよく知ること、何ぞかゝることをならはんや、かつ金は延ぶべきなれど如何で壽命を延ばさんや」仙人答へて曰く、

「爾がいふ所道理なり。然りながら始末といふもの金銀の費えのみにあらず、心勞苦勞も省き心氣を費さぬやうに始末し、色欲を慎み腎を費さぬやうに始末し、飲食をむさぼらずして脾胃を費さぬやう始末をなす。これらの始末が第一にして壽命を延ばしてこそ金銀も用には立つ物なれ、如何ほど金銀を貯へたりとも壽なくして何かはせん。其の五臟をわづらはさぬやうになすは平生質素儉約を守り足ることを知りて心を正直正路に養ひ立つるにあり」と、示しければ彼の商人大に感服したりとなん。

儉約の傳授といふは外になし

こらへ袋のひものしめやう

ある職人つら〳〵思ひけるは、手一つにてする職ほど埒のあかぬものはなし。迚も

立身することはなるまじとて千手觀音へ願をかけ、

「何卒我が手を四五本ふやし給へ」と信心を込めて願ひければ、或る夜觀世音枕元に立ち給ひ「汝が至誠もだしがたけれども後に悔ゆることあり。一旦生えた手は又落つべからずと」の給へは職人答へて曰く「己が願ひの如くならば何んぞ悔ゆることの候べき」と申しける其の翌日見れば忽二人前の手をまして六臂となりけれは大に喜び仕事をなしけるに、何がさて一人にて三人前づゝ働くことなれば大に金をためめ、家藏を重ね大身代となりたれど、斯る不具者となりたれば誰あつて付合する者なく、これが親類といへども恥づれば況して新に縁組なども出來ず、人中へ出れば人に指さゝれ外聞あしければ物見はさておき佛參さへ得せず、まして年老ゆれば力つかれて六臂ありといへども働くことなりがたく、大に後悔し古ほそ〳〵と家職をつとめしことの戀しくなりしとかや。

此の話可笑しきやうなれど世に貪欲邪智にて不正の事にかゝり、金銀をたくはへ相

應の身分になりたる人もあれど、人に指をさゝれ慈悲の心なき故に鬼畜生のあだ名をさへつけられ、子孫までも此の惡名を殘すことといたましきことなり。さのみ邪智不正の不具者とならずとも、質素儉約にして己が家職を出精なさば塵積つて山となるのことわりあれば、たゞ〳〵正直正路になるべきにこそ、歌がるたを取るに、我が前なるはおきて餘所を見わたし、人のもとに目をくばるうちに己が前なるを人に取らるゝものなり。身代を保つも亦かくの如く餘所の金儲けを羨みそれに目がついてあられぬ事にかゝり。己が商賣家督まで人の物としらるゝ人もあるものなり、心をつくべきことなり。

年こしの鬼は豆でもうちだそが
節季の鬼はそれぢやゆくまい

諸人家を保つに禁忌あり、また妙藥あり。

禁物

夜あるき　朝寢　自墮落　三味線　淨瑠璃　尺八　揚弓　碁將棋　双六　酒宴　博奕　茶屋遊　餘所に長居　手の明き　晝寢

此外業の害になることを忌む。

家方保身丸の調合法

朝起十兩　養生二十兩　始末二十兩　勘定十兩　家業五十兩　堪忍五兩（但し堪忍の効能だけ略す）

右六味の藥を自ら細密にし、丸藥にして工夫の上飲み込む時は、身上如何やうにも望みの通りに保たずといふ事あるべからず。此の六味の藥の効能一々に述ぶべし。

第一には朝起き先づ日輪出で給はざる先きにおきるこそ天道の冥慮にも叶ひ其の日も長く何れのつとめも業も自然とよく調ふるなり。然れば孫子も――あしたの氣はすゝむ――と書き給ひしも同前の事と見えたり、早朝には其の日の業も勤めも職もおのづからすゝむなれば是又專一の功と見えたり。

第二には養生の事、此の儀は先づ身分息才にあらずしては何事も成就する事なし、何れの人も息才なるを嫌ふにはあらねども灸をきらひ朝寢をし夜ふくるまで遊び、或は酒宴をして脾胃のたゞれ、はらわたの腐るを厭はず、或は吐し或は人事を忘れて理窟を言ひなどして大にくたびれ、大酒二日醉ひとてあくる日は欝々とし頭痛發熱して、其の形ち、らうがいの如くになり、又茶屋に遊びて大酒沈醉の上にて遊女を犯しなどし、又は危き枝にのぼらねば熟し柿が食へぬやらんとて、其意得がたきことにもくはゝりなどして、好んで樣々の難儀を受け、苦勞心氣を痛め身をけづり終には癪氣の病となり、氣血滯り或は鼓脹脚氣などの病を拵へ、久しくわづらう時は金銀少し位貯へおきたりとも藥代看病の雜用となりて終には身代の病根となるなり、唯達者にあらざれば何事も成就しがたし。

第三には始末の事、尤是はしわき事にはあらず、始めと末との事にて一日の計は朝にあり、一月の計は朔日にあり一年の計は元朝にありと申す事にて、今日の事は今

朝にとくと工夫し、一月の事は朔日より心がけて三十日を思ひ考へ、一年の事は元朝より極月三十一日までの事をとくと極むべきといふ事なり。誰しも三百六十五日を經れば大晦日となる事を知りながら大晦日までの工夫勘定をせずして、うか〳〵と暮して其つもりあはぬ故に大晦日の來るを今更のやうに思ひ、俄に來りたる如くに當惑し、かけ拂ひも大きに不足し何とも先方へ申譯もなきやうに成ること、是皆始末の二字にこもりて始めありて末まで行きとゞかぬ故と知るべし。此の始末の次第は米、薪、味噌、酒、醬油、野菜、鹽、煙草、油、マッチなどの諸入用右の類は十農工商共家々になくては叶はず、是等麁末に費えなきやうに勘辨すべし。

第四には勘定の事、此の勘定と申す事とく〳〵と工夫ある時は身代の持ち損じはあるまじき事なり、かやうの事は人々皆知り給ふ事ながら、此處に申すことは勘定をすればよきと知りながら、多くは中〳〵りにてうか〳〵と後日を頼みにし、何となく日を送る故に大晦日にはとちめんぼうをふる人多し。知れた算用であらうとも心

がけて勘定すべし。孔子も――事あらかじめせざる時は立たず――と仰せられしも皆此の理に同じかるべし。

第五には家業、是も前に申したる通り、業とは官吏は勤め、百姓は農作し、職人は職をなし、商人は種々物を賣買する事なり、此の四民の外は遊民とて聖賢のきらひ給ふ所なり、されば我が業をまだるく思ひて商賣をかへ、諸職をかふる事大なるひが事なり、たとひあはざるやう成共仕にせたる事をなすべし。時節よからぬとて下地の商ひの外に今又外の商ひをくはへる事苦しかるまじけれども、仕にせたる事を捨てる事は甚だ以てよろしからず。只あひがたくとも前より仕にせたる職をつとむるが宜しきなり、其の上何業にても朝暮油斷あるべからず、油斷を我が敵と見て勤め働き精出すべき事なり。四民家業の怠りから右禁物の品々おもひ付く事全く其の業の怠りより始まるものなり、人の性は善なり、元來博奕を致すといへども必ずよしと思ふてなす人はあらざれども、業怠りて心のびおごりて俄に大福長者のかたち

を苦痛せずして、業をつとめずに遊びあるきたく思ふうまい工の折から、何が〳〵は何ほど勝負に勝ちたりなどゝいふ事を聞いて、いざや我も急々にもうけかちて下女下男を使ひ、手かけ、めかけもかゝへ、そうしてこうして遊び、らく〳〵に致すべくなどゝ先きの見えざる事を思ひ、扨高下商ひに出かけ、始めの程はうひ〳〵敷く心おくれ、少しづゝの勝負なれども次第々々に氣も大きう成つて大勝負に成り、しこり負けにまけを重ね、損にそんを積むやうに相成り、後には我が物ながら恥ぢて人目を忍び盗み出し、それも打ちまけて最早目もさめさうな物なれども少しの拍子合にて人の勝を見て又我が着る物もぬぎて是も打ちまけ、致し方なくだん〳〵せまる上は心やすき友達にも嘘をつき、物をかりてそれも打ちまけ、其の友達にも面目なく諸方に義理のたゝぬ事のみに相なり、其の跡は一向どろぼう、かたり同然にして日を送り、いよ〳〵以て致し方なく成るにつけ、おのづからわる工みして人の物をたゞ取る事を心がげ、終には親兄弟親類縁者までも顔に血をぬる事其の身元來の

本意にはあらざれども、ひとへに家業の怠りより出づることゝ知るべし。おそれ慎むべきの第一なり。

しかあれば、よく〳〵工夫して始末堪忍の四字を忘れず、怠らず油斷あるべからず只身をよく保つべしと思ふ人は心せかず他事を捨て、此の家法保身丸を呑み込み、我が業を大切にして此の外によき業なきを思ひ込み、かせぎを心にかけて晝夜油斷なく勤むる時は必ず大望成就し、心任せに隱居して子孫繁昌誠に百年の老を養はるべき事疑ひあるべからざるものなり。

立身成功の基

人の業務に就いては氣力を養ふが第一であります。凡そ業務中人と人との間に懸隔の生ずるのは畢竟氣力即ち根氣の強いと弱いとに關係するのです。此處に學問人品境遇相同じき二人の少年ありとせんか、而して其の一人は根氣強く、他の一人は

自己の非を知れ

根氣弱ければ、弱き方は失敗し、強き方は成功する事は必然であります。實に社會の失敗者は大抵根氣の弱い者にありといはんも敢て過言ではありません岸田吟香といへば精琦水を東京銀座で賣つて居る名高い老舗であるが其の人の言はるゝに、

「人事はすべて氣根比べです。」氣根の強いものは勝ち、氣根の弱い者は破るゝのです。余の精琦水を社會へ廣めるに付いても一々根氣辛抱強き結果ですと申されたとか、此れは精琦水のみならず、何業でも同じことです。一廉の學者になるのも、一廉の政治家となるのも、一廉の百姓になるのも、一廉の職人になるのも皆同じことです。人からやんやと持囃され、評判を立てらるゝやうに到るのは、豈一朝一夕の事ではありません。どんな天才な者でも機敏な者でも才藝人に秀づる者でも根氣の弱い時は、よし一時

は非常に手際は立派に見えて人々より持囃さるゝと雖も、忽ち失敗すること天麩羅の金時計の如く忽ち地金が現はれて人々より排斥唾棄せらるゝのです。何業に限らず其の事に忠實で熱心でさへあれば其の人は必ず他人の想像し得られざる一種の愉快と安心を受くることが出來るのですが、未だ此の境遇の味ひを知らざるものは、其の當人の心掛の足らざるが爲めです。此の輩は速に熱心忠實に立ち働いて其の味ひを得るの境遇に進むやうに務むるのが肝要です。世の中には人の爲したる事を矢鱈に批難攻擊し、甚だしきは以前恩になりたる人に對しても誹謗の言を放ち「人間は飾りなきが第一じや天眞爛熳が一番じや」などゝ稱して相變らず無用の惡口を並べ立てする人もあるが、斯る人は多數の人々から憎まれて同情するものなく孤立の姿となりて遂に逆境に立つの憂目を見ることあり。これ口を取り締るの克己心なきに依るとはいひながら畢竟自ら戒めざるに出づるのみ、如何なる點より見ても斯る行爲の人は立身成功の見込みなき者とす。

假令その人が學問も深く文章も上手で當世得がたき人物なりとも、その癖の爲めに人が持囃さぬのである。實に惜いことだ、人といふものは皆癖がある。なくて七癖あつて四十八癖といへば彼の人ばかり責むるには及ばぬが、然し人は其の惡しき癖は飽くまでも打ち碎いて社會の表面に立つ決心をせんければならぬ。所が彼の人はそれが出來ない。何うも癖を矯正すは難かしいものと見える。彼の位何も彼も辨へて居る人でさへ彼れだから若し彼の人が一大勇氣を鼓してあの癖を打ち碎いて行つたならば、とくの昔に博士にもなり運も開けて世間の人に持囃さるゝに至ることは確かであるが、彼の癖を打ち碎くの勇氣がなかつたから彼の通りの身分だといはれる。其處へ行くと、

新井白石は感服だ。白石思へらく我が癖は短氣だ矯正せんければ百事成功せずと、これより熱心に其の短氣の凝り固まりを打ち碎いたとか、此の白石の如く短氣の者は短氣の癖を打ち碎いて溫和の氣性に變へ、吝嗇な者は客嗇の凝り固まりを打ち碎

いて慈善心に改め、好色や大酒飲みの者は其の好色や大酒の癖を打ち碎いて謹直な心と入れ換へ、陰氣な者は陽氣な心と改め、バツバと金を出す者は控へ目にして貯蓄心を養成し、勇氣な者は飽くまで勇氣を養つて何んな事にも恐くない後れは取らぬとの剛毅の心と改め矯正するが可い。之を改め矯正するのが萬物の長たる人間の人間たる技倆である。斯くして社會に進み出でたらんには、誰か批難攻擊するものあらんや、茲が卽ち運の開くる所、立身出世の階梯である。

安心立命

孟子の曰く「仁は人の安宅なり」と眞なるかな、人の本心は元仁が生れつき故安樂が本なり、仁とは萬の事に憐み深く上を敬ひ下を惠み、總て心に無理な事を思はず身に無理な事をせず、口に理無をいはず、物事すなほにして堪忍づよき人は意に一點の煩ひなし、是を佛家にて安養極樂といふ。

悟

「思ひ中にあれば色外にあらはれて言葉のはしに出るなり」といふて茲に可笑しき話あり。

昔矢鱈に念佛を申した者が死んでひよろ〳〵と閻魔の廳へ出で「私は娑婆で平生念佛を一心不亂に申しました故何卒極樂へおやり成されて下さりませ」といふ閻魔王は獄卒に命じて念佛を改めさす。獄卒は念佛を篤と改め見ていへるやう「成程念佛は澤山ございますれど寢所でふんぞらかして申した念佛や、風呂の中で申した念佛や、雪隱の壁に向つて申した念佛などが多くて其の外に眞實の念佛はございません。殘らず矢鱈念佛ばかりでございます」と申しければ閻魔王大音聲にて「其の奴地獄へやれ」といふ、亡者はこれを聞いて吃驚して「否々私の念佛は皆信心のこもつた箔附きの念佛でございます。もう一度よく〳〵お改め下さいませ」といひければ獄卒殘らず

念佛をふるつて見しに、念佛一つころ〳〵と出る。獄卒は此の念佛をためつ、すがめつ見て「是は少しましな念佛でございます」といふ、閻魔王亡者に向ひ「己れその澤山な念佛は矢鱈念佛で極樂へ行かるゝ念佛ではない。然し只一ッ通用しそうな念佛がある。此の念佛は何時申した念佛じや」亡者つく〳〵思案して、

「ハイ其の念佛は雷の鳴る時申した念佛でございます」と申されたとかや。誠や叶はぬ時の神だのみ、地震や雷の時には一生懸命の念佛故少しはましと見える。

又或所に畜類鳥類不具者を見世物にして世渡りする者ありしが、不圖風の心地と煩ひつき日を追つて重り大熱して囈語に大聲あげて、

「國は丹波の氷上郡親は代々殺生人、親の殺生が子に酬ひ、可愛やあの子は目が一つ、足は鷄、手ははじかみ、見るも後生見らるゝも後生、見ておやりなされ錢は戻り」と近所へひゝくわめき聲、女房は兩隣へも恥かしく又若しも此の儘臨終せられたら迚もよい所へは行かれまい。何卒一言なりと念佛が申させたいといろいろ進

めて見ても、いかなこと〳〵「親は代々殺生人、親の殺生が子に酬ひ……」といふて耳にもかけねば女房は泣く〳〵近所の人に此の由を語り、涙ながら頼みければその人暫く工夫して病人の耳元へ口をよせ聲をはげまし「今日より御停止じや」と言ひ聞かせければ病人はア、しまつた南無阿彌陀佛々々々々々と申せしとぞ。

何分胸にもや〳〵の目當があつて申す念佛は役に立たぬ。もや〳〵の思ひがあると念佛が本家やら、思ひが本家やら分らぬ樣になる。是が本を失ふて末を取るといふものなり。兎角凡庸の人は死んで此の身が直に極樂へ歩いて行き佛の仲間入りして目見えやら振舞ひがすんだ上で、ゆら〳〵した蓮華の上に乘つて百味の飲食そなへられて、又一生安樂に暮す事の樣に心得て居る。夫は大間違ひよく迷ふた者じや。

昔は人が死ぬと土葬、水葬、火葬、野葬とて四品の葬りやうがありしとか。その昔一休和尚の時分、都に富豪の娘ありしが、二八の花の粧ひも夕の嵐と共に散りければ、両親の歎きはいふも更なり、斯くてあるべき事ならねば思ひなほして此の頃活

如來の樣に言ふ一休樣の引導を授けて貰はふと願ひければ、一休の仰せには斯樣になまめかしき女子は水葬にするが可い。よし〳〵愚僧がよい樣に葬つてやらんと、鴨川の邊りに連れ行き彼の死人の首に繩をつけ、引つかたげて川岸に立ち「河船をとめてあふせの浪まくら浮世の夢を見ならわし驚かぬ身の果敢なさよ」と唱へて川へザンブと投げ捨て歸り給ひけるとかや、實に此の浮世の夢が覺めぬ中は川船をとめて漂ふ浪枕じや。川船とは體の事である、留めるとは死んでもやつぱり體がある樣に思ふと居る事であります。

又野葬とし死人を野原へ捨て犬や鳥に喰はせるので今は止んで無い。然し古、檀林皇后の御辭世の歌に、

我れ死なば燒くな埋むな野に捨てゝ
　　瘠せたる犬の腹を肥せよ

との御遺言に任せ御亡體を帷子の辻に捨て參らせたそうである。皇后世にあらせ給

ふ時は御容殊に麗はしくあらせ給ひ、公卿殿上人太夫に至るまで一度見參らせし人人は恐れながら、戀慕の情なき者はなかつた。故に皇后の御仁德にて世の人の迷ひをはらさせ給はんとて斯く捨てさせ給へるのである。如何なる御麗はしき花の御容貌も死骸とならせ給へば色は青白くて眼は落ち入らせ給ひ、御手足は芋のずいきの如く日數經るに從ひ腫れふくれ、臭氣立ち登りて絶へがたし、此の有樣を九想の詩に「膿血忽流爛壞膓」とて肉腐りたゞれ、五臟六腑も流れ出で種々の虫類集り啄むは目もあてられぬ有樣である。是全く皇后世の人に川船を解いて見せ給ひ、戀慕の闇を照らし、浮世の夢を覺まさせんとの御說法である。斯る事もむかし語りとなり今は土葬と火葬のみである。土葬にすれば土となり、火葬とすれば灰となる。左すれば體は土か灰かになつて仕舞つて極樂へも地獄へも行くべき者はない。極樂へ行くの地獄へ行くのといふは必ず心の事である。何分體の最負する人は皆殘らず地獄の下しらべをするので、前にいふ念佛も體を放れての念佛でなければ利益がない

扨我が身を放れての念佛といふは「唱ふれば佛も我もなかりけり南無阿彌陀佛の聲ばかりして」と此の南無阿彌陀佛の聲ばかりになつて我が身はあるのないのといふ事をサツパリ忘れ果てゝ南無阿彌陀佛ばかりに成りきつた所が暫く阿彌陀と同體であるのです。是を積めば自然悟道にて念佛のおかげで悟るといふものである。安心立命を願はんとする者は綴まる所は胸のもや〳〵の思ひを解くより外にない。是も念佛申す時ばかりもや〳〵を解くのじやない。平生商賣體、世間の交りにも假令へ向ふからもや〳〵を持ちかけて來ても夫に取り合はぬ樣にするが肝要である。是も常に正念の工夫が薄いと不思議にも思はず知らずもや〳〵に取り付いて彼の顏つきが氣に入らぬ、今の一言が濟まぬ、全體常からの仕向けが虫にあはぬ、何でも己れ皆返報してやらんと首を傾け腕を組みて我慢の分別增長し、常々持ち合はせのもや〳〵の上に又大層なもや〳〵を重ね、胸一杯になつて息だわしく苦しむなり、是ぞ眞の修羅道ならん。去りながら人によつて何うも、もや〳〵に取りつくまいと

思ふても世間して居る中はそうはならぬ。此方に堪忍しても向ふから持つて來れば
いやでも相手にならねばならぬ、と思ふ人もあらん夫は大きな心得違ひ、昔平の清
盛公はもや〳〵の總大將其の餘、平家の御一門大方もや〳〵であつたそうだ。其の
中にまぶれて居給ひしかども重盛公はもや〳〵は些ともなかつた。又後醍醐帝の頃
も大方もや〳〵の人ばかりじや。それに萬里の小路藤房卿と楠正成卿とはもやも
やはなかつた。又唐土の舜帝も父親が頑なものゝ大もや〳〵、母親がはしたない大
もや〳〵、弟がすねくろしい大もや〳〵、其の中にまぶれて居給ひしかども、聊か
もや〳〵はなかつた。此の方の心得次第で何の樣にもなるものである。三世流轉と
いふて過去現世未來に迷ふも皆もや〳〵の所爲じや御用心〳〵。
「安心立命とは唯それ佛法の所談のみにあらず孔孟の仁義を說きしも「アリストー
トルソクラチース」の說きし哲理も其所詮をいへば則ち人をして安心立命せしめ
んが爲めに過ぎざるのみ、又以て安心立命の人生一大緊要の事なるを知るに足ら

ん」

放心を求めよ

學問の道は其の放心を求めよとて學問の本源を示し給ふ事にて、人と生れし者學問せでは叶はざる事なり、如何となれば學問といふは文字ばかりを學ぶ事にあらず、其の源は心の事なり。何ほど聖賢の書を讀みても我が心暗き時は其の意味通せずして寸毫もあることなし。故に放心と暗く迷ひし心の行方を求め、本心の光明を顯はすを肝要とす。人の心の事物に獨れて移り易き事は火の乾けるに附き、水の低きに隨ふよりも速にして、須臾の間に心の行方を見失ひ思ひもよらぬ事の出來る物ぞかし。つれ〳〵草に、

「筆をとれば物かゝれ、盃を取れば酒を思ひ、さいを取れば双六うたん事を思ふ。心は必ず事に觸れて來る、假にも不善の戯をなすべからず」と誠なるかな眼は見るに移り易く、耳は聞くに移り、鼻は匂ひに移り易く、舌は味ひに移り身は觸るゝに移り易く、意は思ふに移り易し。譬へば猿の梢に渡り或は野馬の馳するに異ならず昔粂の仙人は物あらふ女の脛の白きを見て心移り通力を失ひ落ちしとか、是全く心が放心とせし故なり。物事にふれて放心とするもの多くあれど、世の人の放心と迷ひ易きは色欲に勝るものなし。「誠に愛着の道其の根ふかく源遠し、六塵（六塵とは色、聲、香、味、觸、法）樂欲多しと雖も皆厭離しつべし、其の中に彼の惑ひの一つ止みがたきのみぞ、老たるも若きも智あるも愚なるも貴きも賤きも替る所なしとぞ見ゆ。然れば女の髪すぢにてよれる繩には大象も繫がれ、女のはける本履にて造れる笛には秋の鹿必ず寄るとぞ言ひ傳へらる自ら誡めて恐るべく慎むべきは此の惑ひなり」と、兼好法師つよく警め置き給へり。詩經にも、

亂匪レ降レ自レ天生ニ自婦人ー

とて一度顧みれば城を傾け、再び顧みれば國を傾くと言へり、恐るべきに非らずや般の紂王も數多の臣下及び億兆の萬民を苦しめ、姐妃一人を悅ばし天下を失ふ。周の幽王も褒似一人のみを喜ばし四海亂る。又唐の玄宗皇帝も明君の聞えありしが、晩年に至り楊貴妃の色に戯れ迷ひしなり、漢の司馬相如も自ら文を作りて色欲を警むと雖も卓文君の情にはいよ〳〵迷へり、是等も皆智ある人々なれど末代の誹にかへて一人の女を喜ばせり。吾が朝にても昔より名將と呼ばれし方の臣下萬民を苦しめ一人の婦人を喜ばし、末の世までも名を穢せしもの數ふるに暇あらず。芝居狂言などにもかはらず此の警めあり。藤屋伊左衛門は親及び親類別家の者まで苦しめ、夕霧といふ傾城一人を喜ばし、七百貫目の借金して剩へ親の勘當まで受けしなり、龜屋忠兵衛は梅川といふ遊女を喜ばし、古手屋八郎兵衛はおつまを悅ばし、刀屋新助はいろはを喜ばし、腕久は松山を喜ばし、久松はおそめを喜ばし小性の吉三はお

七を喜ばし、帶屋長右衛門はおはんを喜ばし、井筒屋傳兵衛はおしゆんを喜ばし、紙屋治兵衛は小春を喜ばし、山崎與五郎はあづまを喜ばす是等の輩は或は主人の金銀を引負て難義をかけ、且は親兄弟を泣かし一家までの顏を汚し唯一人の女を喜ばす、不義いたづら殊に惡名を末代に殘し物笑ひの種となるは阿呆とやいはんか禽獸とや云はんか、誠に論の限りなり。古歌に

世間はれぬ戀する人は闇き道にぞまよふなりけり

と又曰く

後の世も哀れなるかな里の犬
打てどもさらぬ忍にしなりけり

同じ喜ばすならば、親主人夫舅姑を喜ばすは人の人たる道にして天道の冥加に叶ひ、立身發達も思ひの儘なるべし。古唐土の虞舜は瞽瞍といへる頑なる父、握登

といへる囂しき母、又象とて奸佞邪智の弟と三人もろともに樣々の姦計をなし舜を幾度か殺さんとせしかども、少しも是を恨まずして能く兩親に事へ、侮る弟を憐み終には兩親及び弟までを喜ばし、又君たる帝堯に事へて忠義を盡し、廿八年の間政を取つて四海億兆の萬民を喜ばし給ひし故大聖人と仰がれ給ふ、又曾子といへる御方は孝養の道を盡して其の親を喜ばし給ひ、且は世の人に親を敬し兄を敬し君を敬するの道を廣く天下に傳へ、我れ一人の敬より千萬人悅ぶと、是人の要道ならずや、故に四海に孝を以て名を揚げ給へり、又我が朝にても忠孝を以て主人親を喜ばし名を後世にあげし人是亦少からず、佐藤繼信は八島の合戰に主君義經公の危き場所にて能登守の矢表に立ちて討死し、主人の命に替はりし故今に至つて忠臣の鑑と譽められ、忠臣藏の狂言にも大星由良之助初め四十餘人は千辛萬苦して主君の讐高師直を討ち其の靈魂を喜ばせし故世に忠義の譽れ高し。

同じ喜ばす中にても出所不慥な女を喜ばし終には身も家も亡し失ふもあり、又主人

親舅姑などを喜ばして末代人の鏡となるもあり、誠に天地懸隔の違ひならずや、是等の心得違は何によつて生ずるか、是全く心の事物に觸れて移り放心と取らるゝことを佛家で迷ひといふ、此の迷ひに就より斯くなるぞかし、此の放心と取らるゝことを佛家で迷ひといふ、此の迷ひに就き可笑しき話あり。

或る富家の息子謠會などの歸りに朋友に誘はれ思はずも遊所へ行きしが段々面白くなりて度々通ひ、ある藝妓に馴染を重ね二世も三世も女夫の約束夜晝の別ちなく通ふ、兩親も吃驚していろ〳〵異見すれども何分彼の藝者が目の先にチラ〳〵見ゆる樣で片時も忘れられず、何をしても手に付かず、狐つきの樣になり、急度異見すれば何うやら無分別でも出そうな樣子故、家の番頭主人大事と思ふ忠義の心から若しもの事があつては一大事と、不承知な兩親を叩き付け彼の藝者を根引にし、懇意の醫者を假親とし表向きの婚禮すみて夫婦睦まじく暮し居けるが、右の藝者不圖風の心地と煩ひつき、種々樣々手を盡し養生させても驗しなく、病日々に重り終に果敢

なくなりければ、息子は掌の中の玉を失ひし心地にて居間へ引込み晝夜泣きくらし居ける故、番頭又々心配し、彼の樣子では氣病でも出てはならぬと思ひ、早速寺へ石碑を建て墓參りをさせ氣を轉せんとの思はくなり、息子も墓參りと聞いて責めて彼れが追善にもと毎日かゝさず參詣しけるが、或時思ふ樣未練ながら最一度彼に逢ひたいが芝居などでは幽靈になつて逢ひに來るもの儘あり、何卒幽靈にでもなつて逢ひに來て呉れまいかと、種々の思ひに迷ひを重ねし意から、世に聞き傳へし反魂香とやらは一度は魂を反すと聞けり、何卒反魂香を燒きて一目なりとも逢ひたいと出入りの者を密かに招き彼の反魂香を調へさせけるが、此の使の男至つて横着者故埒もない香を調へて反魂香と僞り、大分の金を貪りぬ、息子は眞黑に迷ふた意から一圖に彼の香を墓へ持參し、石碑の前へ燒きて信を取り、守り居れば不思議や石塔ゆら〳〵と動く、偖ては奇特があらはれしかと思ふ中、香は次第に消へければ石塔も動き止む、ヤレ〳〵殘念今少し香があらば姿なりとも見るべきにと、力を落せし

がイヤ〳〵明日は香を澤山に用意して何れ一目は逢ふべきと、それを力草に我が家へ歸れば番頭は出迎へ、若旦那お歸りか、然かし先刻の地震には何處でお逢ひなされたと尋ねけるに、迷目からは地震で動いた石塔も奇特と心得違ふとは可笑しき話ならずや、兎角物にふれ事に渡りて意を放心と取らるゝより眞黑に迷ふて樣々の事が出來、世の物笑ひとなるぞかし。故に萬につけて心の行方を見失はぬ樣、放心とせぬ樣、恐れ愼み親主人も安堵し給ひ喜び給ふ樣事ふること、其の放心を求むる端ともいふべし、是則ち人の人たる道にて行末身の冥加もあしかるまじ。

大黑天

大黑天の槌（努力）大黑樣といふ神は何時でも槌を持つて居て滅多に放さないといふのはどういふ譯でございませうか、これには深き理由があるそうであります。今之を處世的に話しますればこの槌を打出の槌と申して大黑樣が一度この槌を振るへ

ばお金がざく〳〵出るといふのは三歲の童子も聞いて居る所であるが尙一層深き敎訓の意味を含める眞の金庫とも稱すべきものであります。然しながら何人でもこの槌を持つて居りますが唯形が異なるので一寸分りません、第一子供のは筆墨等の形となつて居て之を振つて勉强すれば字が上手になれば書家となり、畫が上手になれば畫師となつてお金になり、百姓のは鍬や鎌の形となつて居てこの鍬を持つて深く田畑を耕して米麥等を作り、又商人のはこの槌が筆や算盤の形となつて居て、この筆を持つてせつせと帳面をつけ、算盤を持つてばち〳〵勘定する樣になれば、これ亦お金がザク〳〵出來るのであります、又大工のは鋸 鉋鑿等の形となり、左官のは鏝、漁夫のは櫂等の形となつて居りますから何人でも持つて居ります、要するにこの槌は腕を振へといふ敎訓を意味するので何人でも腕を振つて努力すればその結果はお金がザク〳〵出來るといふのであります。

大黑天の頭巾（向上發展）大黑頭巾と申して大黑樣の頭巾は何人でも知る所であり

ますが、あれは何を意味するのでありませうか、あれは上を見ろといへるのであります、人體の最も上は頭で有ます、上を見て上の人に見倣へ、我れ今不幸にして貧家に生れたりとて落膽するに及ばない、勉强次第立派な人になれます――精神一到何事不成――で教育家とならんと欲せば小學校長若くは師範學校長に見倣ひ官吏たらんと欲せば警察署長とか郡長とか知事とかに見倣ひ、農夫たらんと欲せば老農に見倣ひなさい、嗚呼彼の人は山高帽子を被り斜子の羽織を着て立派な何とも知れぬ見事な下駄をはいて居る、我も彼の人の如き立派な人とならんと欲せば腕を振つて努力なさい、必ず腕次第立派な人となれます、其の時は理想の服裝をしても差支はありません、然し奉公人としては考へものであります、蟹は甲螺に似せて穴を掘るといふことがあるが、人は身分相應の事をしなければ家も屋敷も終には其の身も滅亡するの不幸に陷ることがあります、世間には立派な自働車に乘つて意氣揚々として紳士風を吹かせて居るものもあるとの事で、不思議であるからよく〳〵調べて

見れば鄕里の家庭では火の車に乘つて奔走するので債鬼や執達吏はお氣の毒とや思ひけん、毎日お見舞するとはさて〳〵大黑樣の頭巾も知らないと見えます、敎へて上げたいものであります、皆さんは棒ほど願ふて針ほど叶ふといふ事をご存じでせうが、今奉公をして居ても一生奉公するなどゝいふ考へを持てはなりません、今はこんな奉公をして居ても後には立派なお孃さんとか立派な大旦那とか紳士紳商になつて土藏でも建てゝ見せるといふ位の考へを持つて働かなくてはなりません、夢にもこんな奉公などをして居てはつまらないなどゝいふ考を持つてはなりません。

――つまらぬといふは小さな智慧袋――

大黑天の袋（貯金）大黑樣は何時でも袋を脊負つて居て放さないのはこれ亦深き理由があるのであります、彼の槌を振つて拵へたお金を何時でもこの袋に入れて置くから費つた事がない樣であるがそうではない、世の中には貯へるばかりで人の爲め世間の爲めになる事には鐚一文も出すことを厭ふ人もあるが、斯る人を吝嗇といつ

て排斥するのである、大黒様は人を助けるとか公共の爲めになる事には惜まず、必要とおもへばどし〳〵出して費ひます、減ずれば又槌を振つて拵へ、其の袋に入れて置くのであります、人は何時病氣盜難火難等に逢ふやも知れませんから常に貯金の心掛けがなければなりません、されば政府に於いても此の意を體して兒童に至るまで貯金を奬勵して止まないのであります。

大黒天の俵（貯藏）大黒様の俵は貯金と等しく必要にして人生離るべからざること恰も魚の水に於けるが如く、汽車の蒸氣に於けるが如くにして活動の原素とも稱すべきものにて特に我が國人の一日も缺くべからざるものなり、さればこそ大黒様は萬一俵を離れては何時凶年に出逢ふやも計られねば、遠きを慮りて我々に食糧を貯へよとの暗示に外ならぬのである。昔交通不便の時代には金を懷にして道路に餓死せるものもありしといふ、今の少年は金錢さへあれば米麥などは何時でも買へると思ひ、斯る話を聞いて虚言ではないかと笑ふものもあるかも知れぬ、如何に大

正の今日と雖も新穀を收穫するまでは前年の俵を貯藏するの考へを持たなければなりません、俵の貯藏は必要であるが昔の烏羽繪の如く糠を入れたる俵ではない、昔は隨分世間體を裝ふて人目に掛る所へ俵を積み置き、一旦火難に逢ふて近所より駈けつけて之を運搬すれば驚くべし、二俵も三俵も輕々と手玉にしたといふことがあるが、大正の今日では斯る俵ではなくして改良俵裝の然かも二重俵で十七貫目以上でなければ貯藏するに足らんのである、世間には今日あるを知つて明日あるを知らず、今年あるを知つて明年あるを知らざるものあり、僅かの收穫あれば直ちに之を賣却して目前の口腹を樂ませ、翌年の食糧に差支ふるものあり——人遠き慮なければ必ず近き憂あり——泣く面に蜂——不幸にして傳染病は這入る果ては親子の葬式を親戚近隣の同情によりて漸くいとなむを得るの悲境に陷るものもあり。

大黒天の腹（大膽）大黒様はまた大きなお腹をして居るがあれは何を暗示して居るのでありませうか、あれは小さなお腹を持つた大膽なれけち〳〵するな僅なことに

腹を立つな短氣は損氣の元であるぞといふ教訓に外ならぬのである、彼の織田信長公は如何なる人でありましたらうか――鳴かずんば殺して仕舞へほとゝぎす――かる短氣な人でありましたから光秀の爲めに本能寺で最後を遂げられたのでありまし、又秀吉公は如何なる人でありましたらうか――鳴かずんば鳴かして見せうほとぎす――かゝる人でありましたから漸く三代續きましたが、家康公は如何なる人でありましたらうか――鳴くまでまたうほとゝぎす――かゝる氣長な大膽なる公でありましたから織田豐臣の如く血を流さずして十五代天下泰平で首尾よく明治の明らけき御代となりました。めでたしめでたし。

至誠

孝行になる傳授

私は先生兼て御存知の者で御座います、兎角繼母が六ケ敷舊年も既に大破談に及ぶべきを先生の御意見にていろ〳〵と心相を改め、ならぬ堪忍いたしたけれども、もう此度は仕方なく事の破れに至りますか、斯やうな時にも心相にて破れぬ相になられますか。翁の曰く其の許に先達ても申す如く、ならぬ堪忍いたさるれば直ぐに孝子の相とな

る、孝あれば天幸を下して左様の破れは出來ざれども、其許はなる所までの堪忍にて、ならぬ所の堪忍するの心相がない故又々破れる相となる、ならぬ堪忍を強くせられよ。

客の曰く是迄の苦勞心棒數年にてならぬ堪忍に堪忍を重ねたればこそ今日迄は火の手も見せず、此の上の堪忍は繼母にいびりせめ殺されて死で仕舞より外に仕様はございません。

翁の曰くそのせめ殺され死んで仕舞ふといふことがよい覺悟である、御前に限らず世の人は誰も彼も皆せめ殺されて死んで仕舞ふので、酒色すきは酒色のためにせめ殺され、貧乏人は貧乏のためにせめ殺され、金持は金の爲めに一生をせめさいなまれて死んでしまうのである、是等は皆道ならぬことながらも死ぬのであつて道の道たる死をなすこそ幸である、僧は法のために死し、家來は主のために死し、妻は夫のために死し、弟は兄のために死す、御前の樣に義理ある親のために死ぬのは子た

る道の幸であつて是に增した人の果報はない、孝子に我身なしといへばお前も何んの彼のといはず、我身を吾れと殺して仕舞ふ心相になつたなら浮む瀨の長命富貴の相ともならう、或人の物語に、

昔南都猿澤のほとりに市之進といふものがあつて夫婦円福に暮して居つたが女子一人出生して名をお友とつけ蝶よ花よと可愛がつて育てゝ居つた。月にむら雲花に風で此のお友が五つの時に慈愛深き母はむなしく無き人の數に入つて仕舞つた。父市之進は後妻をむかへたが此の後連れに一人の男子と又一人の女子とが生れた。ところが父も又お友が九つの春世を空しくも辭し去つたから、あはれお友は此世に便なき身となつたので世間の人も大變ふびんに思つて憐んで居つたが、母はまゝしい心からこのお友を大に惡み無理無情のみにて、我が生みし二人の子供には厚くしお友には冬も綿入れを着せず、又夏は暑苦しきものばかりを着せ、或時は食事を與へず日々の打擲、聞くも中々世に恐ろしき振舞であつたがお友は少しもこれを恨まず、

母は母の道ならねどもお友は子たるの道を盡し身を捨てゝよくつかへ、二人のおとゝひには眞心厚く其の愛することも又一通りではなかつた、二人の弟妹も母の惡しきに習はずして姉の善きに見習ひ姉を大切にしてよく言ふことを聞いた、母は益々お友を憎み或夏の夕方など熱湯の如き湯を沸かし湯氣でさへ目もくらむ樣なのを盥に入れてお友に向ひ、お前早くこの湯のさめぬ中に行水せよと、鬼の罪人を地獄の釜の中へせめ人るゝ樣なのにお友は驚き魂も消えて悲しかつたけれども心をすえて、どうして母の言葉にそむくことが出來ましようか我が命もこれぎりであると覺悟し、はいと言つて既に湯に入ろうとした時、今年十一歳になる弟が大きな桶に水を入れ持つて來て此の盥に打ちあけ、姉さんより私が先に入ると飛び込んだから母は驚いて直ぐに抱き上げたが、身の皮破れ肉たゞれて二ケ月計り床に休んだ、母は一層お友を憎み程經て今度は熱い酒を茶碗に入れて何か一腹の藥を混ぜ、お友に早くこれをお呑み此の藥を飲めば美面がよくなるからと突き附けたから、お友は詮方

なくあやしきものとは知りながら押し戴いて飲まんとするを、今度は今年九ツの妹が姉の茶碗を引き取つて美面よくなる藥なれば私が飲まうと口を附けしを母は驚き其の茶碗を突き飛ばして我が實の子には飲ませなかつた、斯樣なことが度々であつたけれどお友は少しも母を恨まない、然るに其夏繼母が大病で既に危かつたのをお友は大層心配して猿澤のほとりなる觀世音に毎日お詣りして母の病ひの癒ること計りを願ひました、其願は母は命數で命のつくる期もあらば我が命を取つて母を助け給はれといふも熱心に祈願したからやがて孝心が通じてか終に母も全快した、お友の喜びは一通りでなかつたそこで其年八月の十五夜、月見の宵にお友が母に申すには、私はこれから觀世音へ月見團子を持つて參つてお供へ致し、當夏から大願申し奉りましたお母樣の全快なすつた御禮に詣で度思ひますがと伺ひました、母はそれは感心なことである。此母が病氣全快のお禮に詣るとは嬉しいことである早く團子を供へてお呉れ、そしてお前歸り道で過つて猿澤の池なぞへ落ちてはいけません

よ、とそれとなく落ちて死ぬことを進めたがお友は露程も耳に止めず、供物を取り揃へて觀世音に參りいと懇に御禮を述べ又母の長命を深く祈念して歸り道に猿澤の池をながむれば、いとゞさびしくあはれなる秋の夜の空すみ渡る月影の鏡の如く池水にかゞやき影じうつるを見て、思はず知らず涙をはら〳〵と流し、思へばかなしくも我が四つか五つの頃であつたか、自分を生んだ母樣が月見の夜半に自分を抱いて此處に來て、あれを拜めよ是を見よ、上にものゝさま、下にものゝさま、空にも月よ池にも月よと自分を愛し、たはむれて申した言の葉が今猶耳に殘つて居るが、今池水にうつる月に過にし母のおもかげがそこゝに見ゆる心地して如何にも悲しく、又父上は毎年月見の夜に提重やうの物を調へ自分をいざなひ來り給ひて女の子は晴れ渡る此の望月をおがめばよき子を持つのであるといつて、深く愛し年毎にかゝさずつれて來給ひしもはや七とせの秋を經て、父を訪へども跡もなく母はもとより幼くて別れし事故覺えねど、今宵の月こそ形見にて亡き父母のお姿を、今目のあ

たり見るが如き心地するとて涙の雨に袖をしぼり。

はれわたる月にあはれの增鏡
父母のすがたのうつる池水

と詠じて、思へば〳〵世に自分ほどかなしきものはない、生みの母樣には幼くしてわかれ又父樣には九歲の時に別れ、まゝしき今の母樣は寢ても覺めても自分を憎み給ひて度々の御毒害あやうきの數々を二人の兄弟に助けられ、既に今宵もなさけなし池に落ちて死したらば母はよろこび孝行なりと世に心なき御言葉、是を思へば所詮生きて甲斐なき身の行くする毒害などにあひて死んだならまゝしき母の惡名を世に出す樣なもの、一層父母の形見の月宿る此の池水に身を投げてうせはてなば、お友こそ狂氣亂心なりと世の人の思ひ給ひて母の惡しき名も出でざれば是ぞ寸志の孝ともならん、さは申せどもかなしきは生みの母の我を抱いて此處に來り早く成人せんことを願ひ父は毎年此處にいざなひ來りて我を愛し、よき子のあらんことを樂

しみ給ひしに、此處にて今身を投げて死するとは如何なる事の因縁ぞや、南無大慈大悲の觀世音私空しく死し行くとも極樂にて實の父母にあはしめ給へ、又跡に居給ふまゝしき母の惡名立たず隨分長命し給ふやう二人の弟妹の無事息災にて成人し末廣々と榮ゆるやうに守らせ給へ、只あひたきは弟と妹なり、影になり日向になりて我を愛し我を助けしに死する命は露ちり程も惜しからねど弟や妹に別るゝ事の悲しさよ、斯樣の事と知るならばとくと二人の顏も見て是迄の親切の一禮ものべ暇乞をもなすべきに思はぬ今の別れぞや、いやしき此の身は死するとも心は永久其方達二人に附き添ひて隨分無事に榮へんことを守るぞよ、いとなつかしき二人ぞと池水に立ち向ひ、

我ながら我を名殘りの水鏡
見るにつけてもおもふはらから
池水に捨る此身はすまずとも

まゝしき母の名をばにごすな

とよみ終りてすでに池中に飛び込まんとせし二つの袖を姉樣待つてと止むるに思はず頭をめぐらせば只一目なりともと思ふ弟妹なるに驚き且つ嬉しくも二人を固く抱きしめ、そち達は如何にして茲に來りしぞあひたかりしぞよろこばしやと益々固く抱きしめ、悲しき中にもいたはれば二人の妹も慨き悲しみ、姉樣お前は死ぬるのか吾等二人は何處迄も必ず姉樣に隨ひ行く程に若しも池へ飛び込みなさるなら二人も從ひ身をすつべし、妹も私も宵寢してありしに夢の中に觀世音が來り給ふて申すには、二人とも早く行きて姉を助けよ、姉は今猿澤の池に沈むぞや、早く行きて助けよと、の給ふに驚き寢めて私が走せ出さんとせしに妹も同じ夢なりしか兄樣姉樣を助けに行かふと泣き出す、早くお出と手を引きてひた走りに走りしが妹が道にて三度までころびしそれ故にかくぞおそくなりました、姉樣が死に給ふなら此の二人が先に死にましようと飛び込まんとする二人を引き止め抱きしめ、扨も〳〵その樣に

此の姉を大切に思ふて暮るゝ志何んとお禮を申そうか、去りながらかしこい〳〵二人故よく〳〵姉のいふことを聞き分けて呉れ、そち達には何んとも濟まぬことながら此の姉はどうしても生きて居難き譯あれば是非とも今茲にて死ぬるなり、そち達二人は隨分長命して御母様へ孝行を盡し過ぎにし御父君への御追善は必ず〳〵忘るなよ、又此の姉が實の母様の御とむらいと此姉が亡き跡をもとふて給はれよ。隨分々々傷せぬよう稽古事をば精出して姉に代りて父母の御名をも上げてたべ、是れのみ頼み申せしぞと今は絶え入り打ち慨けば二人の弟妹も聲をあげ消え入るばかりに泣きしづむ、やがて二人とも立ち上り何處までも姉様に隨ひて行きましようと又も池中に飛び込まんとて兄弟三人爭ふ折柄、後の方に聲を放つて倒るゝ人あり、三人ともに驚き見ればこは如何に我母なり、母は涙にかきくれながら聲を放つて申すやう、如何なる過去の因縁にやそち達三人は共に菩薩ともいふべきに引きかへ、母は鬼にも蛇にも勝れる惡心の今更何んといふべきぞ、過ぎし夫への申譯もお友が實

の母や又お友にも何んとて顔の合はさるべき、そち達三人が先程よりの樣子を見ればこれを赦すとも天道何とてゆるし給ふべき、お友には二人の子供を頼むぞよ、二人とも只姉に萬事をまかせてよくつかへよ、草葉の蔭より身に添ひてそち達の榮を守るべし、と言葉を殘して池水に飛び入らんとする母を、三人ともに一代の力を入れて引き止めお友はかなしく聲振はして申すよう、母様是非に止まり給へかし、わらはも命は捨てませず今よりは四人ともに睦ましく幾ながらへて樂しくも世をのどかに暮すべしと誠顯はれ申せしかば、母のよろこび一方ならずお前が死なずば母も共に永らへて今迄の非を悔い改め深くもお前に詫び入ると、涙と共に眞實の面に見えて僞りなきに二人の子供も大に悅び、母と姉とを伏し拜み世に嬉しくも有難しと悅ぶ顔の神妙に、母も姉も堪へ兼ねて大地に倒れて伏しまろび悅び涙に袖をしぼつた母はよう〳〵起き上り三人の子は格別である鬼蛇に勝りし母の身の今善心となつた

事は是皆大慈大悲の御惠であると大に悅んで深く觀世音を拜んだ一首に、

人ならぬ身の猿澤も曇りなき
　子ゆゑに闇のはれし月影

と詠じ誓ひを立てゝ非を改め、善に化して其後は親子四人の睦ましきことは實に譬へ樣もなく何人もこれを羨まぬものはなかつた、お友が孝心二人の弟妹の誠心母が惡を速かに改めて大善人となつた其德を天道はどうして是れを空しくしましようか美名は次第々々に四方に聞えて遂に尊とき御力がお友の孝行なのをしたつてお友を招き迎へ子孫は尊き身と榮え、二人の兄弟も世に稀なる富貴の身となり又母も目出度く世をやすらかに此上もなき果報の身となつたそうである。

との物語り何んと結構な話ではないか御前も何のかのと言ふより今直ぐ此のお友になつた方がよい、舜何人ぞ我何人ぞ心相さへよくなれば今の繼母が鬼蛇の相も忽大悲の相となる、心相さへ改むれば凶も吉惡も善貧相も福相苦も樂短命相も壽相となる、禍福門なし自ら招く所といつてあるも唯心相の一つである舜をしたへば舜の心相、堯をしたへば堯の相貌、桀紂をよろこべば桀紂の相となることは自然の理であるからそのムチャクチャして居る我心を直ちに改めてお友の心を自分の心とし、ならぬ堪忍をしたなら忽ち孝行の相と轉じそうして天がその德を助けて如何なる母も人の道を行ふやうに至らしむるであろう、母の母たらざるは母の母たらざるにあちずして汝が子の子たるの心相でないからである善惡ともに自分の心相に立ち歸つて他人をためず我身を正し、行ひ得ざるものある時は却て我身に求めたなら孝行の相が發するであろう、孝行の相とさへなればたとへ鈍でも不器用でも貧乏でも文盲でも何んでもよい百行の源であるから萬善の長者と榮へ子孫目出度大福相となるであらう。

と翁の諭しに此の人大に感涙數行にして、誠に私の今までの辛棒は皆なる堪忍計りでございました。今後は必らずならぬ堪忍を堪忍して只今お話の孝行者お友の樣な

心相になりましようと、

よしあしの人にはあらで我にあり
形直うて影もまがらず

此の歌を兼て聞いたことがありますが只今御蔭で初めて心に確と聞きました。翁和鏡をとりて曰く嗚呼尊い哉心相、奇なるかな古人の訓言、汝忽ち家内和合し子孫榮昌、福壽發達に至るべきの相貌をきざせり、と悦んで休みました。

敬畏の心

詩にいはく――爾が室にあるを見れば、こひねがはくは屋漏にも愧ぢざらん――と見えまして、君子は一人居つても不行儀な事はなさらぬ、實に人の見聞かぬ所は至つて大事の曠の場所でございます、うろたへると人にも見落され大恥をかゝなければなりません。中むかし世の亂まして此處彼處に盗賊おこり在方町方おびやかされて一日も安き心はなかつたが、其の頃盗人二三人夜ふけてある家を窺ひ、戸のすき間より内をさしのぞいて見れば年の頃四十計の女たゞ一人圍爐裏の前にすはり粥を煮て居ります樣子、此の外にも人やあると、なほ窺つて居りますうち彼の女粥のにえ加減を試みるありさまを見れば、鍋の蓋を取り清らかな箸にて粥を少し蓋の上にはさみ上げ、指にて押潰して

試み。更に口中に入れません、其の行儀の正しいのを見て盗人大に恐れて逃げ歸つたとのこと、是がこれ獨を慎むの奇特でございます。私どもは兎角不行儀で、これは人の見ぬ所、これは人の聞かぬ所、是程の事は大事あるまい、此位の事は知れはせまいと自分ひとり合點して道のない方へ頭を突つ込み、これが理屈だ、是では何もいかん、あれでは何もならん、かうすれば勝手がよい、斯うせん

と勝手がわるいと滅多に身びいき身勝手でこじつけ心安く渡られる世の中を無理無體に苦みます。ある人の歌に、

岩根ふみからたちわけてゆく人は
やすき大路をすぎがてにする

と朝から晩まで岨道を横ばひする不行儀な蟹仲間が多いのです困つたものではありませんか、其くせ人の横ばひするのはよく目にかゝつて見事人の小言はいふけれども、己が横に歩くのは少しも目にかゝりません。又ある人の發句に、

蟹に見て氣のつく岨の清水かな

面白い句ではございませんか、此句を我が得かたに取つて見れば、人の横ばひが目にかゝつたら、少しわが身に立ちかへつて我も横這はして居らぬかと氣をつけてごらんなさい、此氣がつくと愼みの心がおこる、愼みの心が起れば自ら生れつきの性をやしなふ便になります、もし少しでも愼みがぬけると離れられぬ道を無理無體に

離れるによつて甚だ苦しい、それ故に朱文公も是を以て「君子は常に敬畏を存じて見ぎかずといへども、またあへてゆるがせにせず、天理の本然を存じてしばらくの間も離れしめざるゆゑんなり」と註をお下しなされました、すべて敬畏の心を存ずるは人にむかふばかりの事ではございません、萬物に向ふに此の心をもつて向へば宜しくないといふことはございません、米麥等の種物にてもつねづね敬畏の心をもつて大切にいたはり取扱へば隨つて見事に出來作德も多くあります、又茶碗一つ土瓶一つを取扱ふにもおそれつゝしむの心があれば取落してわる樣な無調法は出來ますまい、まして主親に向ひ、夫兄に向ひ、此の心あらば忠孝貞節おのづから勤まります、但し畏れつゝしむといつてもワナ〳〵とふるへながら致す事ではございませんん、敬畏といふのは只大事大切と思ひ詰める事でございます、別けて大事大切にせねばならぬのは各自の家業です、此の家業は皆其の家々の御先祖や大祖父樣親御の代から仕來りの家業でございます、此の家業をはじめることは一朝一夕のことでは

ございません、鎗に血を付けたり、鎧の袖をしきねにしたり、又は肩に棒を置いたり、或は草鞋を作つたり、雨にそぼぬれ雪にうたれ、食ふものも得食はず着る物も得着ず、口をしい目も堪忍したり難儀な事も辛抱したり、千辛萬苦して此の家業の基をお立てなされたのだから其の子孫として己が勝手な氣隨にまかせて此の仕事は引きあはぬの、畑仕事はきらひだの、こんな小商しては渡世になるものかなどゝ、兎角餘所外へ目がついて仕來りの家業が可厭になります、乃で百姓が商をし商人が醫者になりいろ〳〵に化けて世間の人をたぶらかす恐ろしい事でございます、よく考へて御らんなさい、引きあはぬ商賣でも埒のあかぬ細工でも、見事先祖代々世渡りが出來て來たので、それが今更渡世にならぬといふのは皆これ家業に精が出ぬのでございます、是を怠ると申します、此の怠りの起る所は身の分限を辨へませんからで、分とは士農工商それぞれの分ち、限とは町人は是だけ百姓はこれだけ職人はこれだけと皆それ〴〵に住居衣服食物は申すに及ばず身分だけの限りがございます是を分限と申すのであります、その分限を過す所から物入りがつよくなり入目が多いに付けては金儲けが足らぬやうになります、乃で家業のこしがぬけて自ら精出して勤めることがならぬ故遂に先祖から仕來りの家業を取替へるやうになります、こはい事ではありませんか、めい〳〵身に立ち反つて愼しまねばなりません、たまたま據ない事で家業をかへる人は止むを得ぬのでございます、夫を手本にして滅多に商賣をかへたがる人は――鴉、鵜の眞似をして水をのむ――と申すものでございます。

おこたりも夏のかせぎもほど〳〵に
穗にあらはれて見ゆる秋の田

と申して七八月頃の炎天にぶつ〳〵と煮え返つてある中へ四つばひになつて腰ざり這入り、脊中はごらんで炙天をおろさなければ判らぬやうに眞黑に日にやけ、汗はしづくになつて一番草二番草三番草とねんごろに手入れした田も、又ぶしやうにな

つて畫めしの箸を放すと永の日を夕方まで晝寢してのら〳〵と明しくらし、一番草もろく〳〵に取らぬ、田も青田の時は同じやうに見えますけれども秋になると恐いもので手入れをした田は實がいつて皆俯いてゐる、又不精した田はひよろ〳〵と立つてゐます。

人の怠りも此の通りで平生は格別おごつたやうにも遊んだやうにも覺えません、昨日は是ほど怠つた今日は是ほど油斷があつたと其の折々はわかりも致しませんが、十二月の大晦日には書出しは積んで山の如く胸づかへして飯も喉へ通りません、ひろげて見れば皆それ〴〵に覺えのある事此の時手を持つて胸を打つてもモウおそい是皆平生の油斷からで兎角怠らぬやうに致さねばなりません、かんざしは大事か花見は大事か此の位な事はしても大事ないとゆるす心の果ぞかなしきで、所詮分限を辨へて立反らなければなりません、それですから中庸にも、

――君子その位に素して行ふ其外を願はず――とお示しなされたのでございます、

これに就いて面白い話がある、ある茶人の家へ道具屋が參りまして「モシ旦那この道具を御らんなさいませ」とさし出せば旦那が手に取つて「ホンニ此の茶碗は時代が見える書付はないか誰が手づくねであるか」「ハイこれは武藏坊辨慶が手づくねの茶碗でございます。」「いかにも其の時代と見える代金は何程か。」「ハイ〳〵三十四文でございます。」「ヨシ〳〵これは貰つておかふ、時にこの蓋置は又よほど時代が見える、鼎足でもなしまた三人形でもなし、」「ハイこれはむかし鴻門の會の節樊膾が楯の板をはさんで門やぶりした時の鎧の金物でございます、」「それは大した時代ものである、これも序に買ふておかう、時に此の香合は大分あたらしう見えるがこれは誰の作じや」「ハイ〳〵これは加藤清正朝鮮征伐の時朝鮮王城の土をとつて手製なされた香合でございます」「それは一段面白いこれも序に買ふておけ、何れ近々茶を出さねばならぬ、先づ辨慶の茶碗樊膾の蓋おき清正の香合よい取合じや、しかし皆兵ぞろひじや是はどうした事じや」と問はれたから茶道具屋がぬからぬ顏で

「つよい筈でございます、たんと家をふみつぶして來た道具だからといはれた。」ナント恐ろしい話ではございませんか、茶碗や香合ばかりの事じゃない、小間物屋が持つて來る仕入箱の中にも朝比奈や辨慶が本名をかくして櫛笄になつて居やうも知れません、うろたへると身代を兵共にたゝきつぶされます、其の外古道具古手見世質屋の藏に積んであるしろものは皆身代をふみ潰した兵、何處に埋伏して居るやら知れぬ油斷はなりません、兎角大事大切の慎みがぬけると大騒動の基だから御用心なさいませ。

親の賣物

昔親賣ふ〳〵といつてあるく者があつた誰が一人買はふといふものがない、ない筈です皆銘々親達を持ち退屈して此方の親父樣もモウ極樂まゐりなさる時分だがといふ位で誰も買ひそふな人はない、時に又世には物好な人もあるもので、世帶を持つ

両親の恩を知れ

てまだ間もない若夫婦が相談して何とマア哀れな事でないか、賣るゝ親御達が不仕合か息子が不孝なのか但しは子供のない人か何にしても氣の毒なことである我等は幼少で親達に離れ一向親の味知らず產みの御恩を報ずる事も出來ないがどうだらう人の親でも我が親にして朝夕つかへ心一盃御介抱申したら少しは產みの親達へ御恩送りにもならふかしら、兎角年寄のある家は滅多に潰れぬといへば家の祈禱にもなる事だから其の御老人方を買ふて御介抱して見やうかと夫婦とも相談極つた所へ「親賣ふ〳〵」といつて來た幸だと是れ親買ひませうドレ見せなさい「ハイ代物は家にございます父親が六十八母親が六十三隨分達者で代物は能うございますよ」「直段は何程するぞ」「ハイ御夫婦で代金千兩です」「ヤアそれは高い自分達は新世帶持ちだから今少しまからない

か「否々現金掛直なし一兩も滅りません」といふをそんなら先づ代物を見せるがいゝ「ハイ左やうならば明日どこそこまでお出なさつて下され私が迎ひに出ませう」と約束して歸る。

扨翌日金を拵へ夫婦つれ立ち約束の所まで行つた、前日の人は待つてゐて「サアお出でなさいませ」と同道して直に彼の住家に行つて見れば門搆へ玄關付是はたいした物だと思ひながらも直に座敷へ通つて見れば扨結構な座敷で、お茶の煙草のと持ち運ぶ菓子盆には山のやうに菓子を積んで種々と御馳走する、暫くすると老人夫婦が出て挨拶する。

「我々を買ふて下さるは此方衆か、いかいお世話でござる、隨分可愛がつて下され頼みます、我々夫婦年寄つて跡相續する子供もなく難儀に思ひます所よく買ふて下さつた忝なふござる、幸田地も少々あり貯金も十萬兩許りあり外に種々の證書も三萬兩許りある、此の家屋敷はいふに及ばず是を讓るべき眞實の養子がしたさに賣りに出しましたのを能くこそ買つて下さつた、なふ斯う親子となるからは今日からは皆な此方衆のものじや程によいやうにして下され」といつて悦んで居る、吃驚したのは二人だが何とうまひ物ではありませんか、親の恩が知りたいと思ふ眞實心から天道樣よりお授け下さる榮華の身、猩々のうたひに、

我が親に孝あるにより次第々々に富貴の身となりて候

とあるが實にあり難いことである、然るに世間の多くの人は何うであるか一千兩所か一錢も半文も出さずに親御樣の跡を大きな顔してぬつくりと丸どりする、其のお禮には強い顔して睨んだりしてゐる、勿體ない事ではないか、自らは遂に一日も親を安心させた覺えもなくて我子には孝行させてかゝらふとするから息子が金箱にかぶり付たり家をゆすぶつたりして微塵に打ち碎いて仕まふ。でとう〳〵家屋敷諸道具まで天道樣に引取られてしまひ其れから先は何になるやら知らぬ、恐いものではないか、其の始めは親御樣にすねたり不返事した滯りであるこれが皆各自好む所を

建立するので蠻喰ふ虫もすきく〳〵で此の夫婦の衆は親ずきである、その外女房ずき妾ずき、道具ずき、仕事ずき、のらずき、慾ずき、損ずき、あまひものずき、辛ひものずき、金ずき、自慢ずき、卑下ずき、癪ずきと種々さまざまの物好きがある、皆な虫の業でその中親ずきが最上理詰がよい、次第〳〵々々に富貴の身となるが何方もお望みの方はありませんか。

すてられし
うきを忘れて
忘れなよ
たのみし君が
深きめぐみを

物忘れ

昔魯の君夫子に告げ給ふに、我國には殊の外なる物忘れする者ありて我が宿がへをなすに女房を忘れしものありと語りしかば、孔子答へての給ふに、それよりも猶物忘れする者あり、傑紂の君は我身を忘るとの給ひしとかや、此の夫子の御教へはあり難きことにて傑紂の君のみならず世の人皆我を忘れて色に迷ひ我を忘れて酒に飲まれ、我を忘れて短氣恪氣をなし、其の一朝の怒りに其の身許りか親類の義理も忘れて難義をかけ慾の爲めに身をも、家をも子孫をも忘れて滅ぶるもの多し、是皆な其の身を忘るゝ故なり、我が親の恩を忘れざれば自ら子孫亦孝なり。

古或國に殊の外の富家ありけるが此の人稀なる物忘れなりける故いまだ妻の縁もなかりけり、又その近國に美目よき富家の娘ありしが是又生れつきての大なる物忘れなりける故他に貰ひ人もなく空しく年行きける然るにその邊りに一人の男ありしが是又殊の外の物忘れにてありけるが、同氣相求むるとか、此の物忘れの男の仲人にて彼の物忘れする娘を彼の物忘れする富家の方へ縁談を取り組み、日がらをゑらみ彼の娘を此の物忘れする男が連れ行きしに、聟の家富家なれば玉をつらぬ銀燭の光りに金屏風まばゆく山海の珍味を列べ大に酒宴ありし其のなかばにて此の仲人申

しけるは、

「私は貴嬢をつれて此のお家へ始めて參り斯やうに御馳走にあひまするからには切度致し候事にて參り候儀と存じ候へども、先刻よりの御馳走にてとんと肝心の用事を例の物忘れにてさつぱりと忘れましたが今宵の用事は何にてありしか」

と娘に尋ねしが此の娘も大いなるかねての物忘れなれば一向に覺えず

「されば今宵かやうに參るからには、何か用事あるに違ひはあるまじと思ひますれど例の物忘れにて忘れぬる。」

と申すに仲人も大に困りて聟殿に向ひ、

「今夜兩人にて參りし用事は何にて候や。」

と尋ぬれば元來聟殿も大物忘れなれば、

「一向に我等も忘れ候て面目なく候へども所詮是を思ひ出すは中々五十年六十年からでは思ひ出されず候間各々は一と先づお宿へ歸り給へ。」

と云ふに仲人も娘も我宅へ歸る道も家も忘れぬれば歸られずといふ聟殿も大に困り何卒よき智慧もあらんかと三人ともに種々工夫した上、よき了簡こそあれ、吾々こそ忘れぬれど家來の男女は今晩の儀を覺え居るべし、お互に家來を是へまねき尋ぬべし、と三人ともに力を得てとも〴〵に三人の家來を呼びて尋ねしに三人の家來も皆々顔に皺をよせ互に赤面して申しけるは、

「私共も今晩追々の御馳走にて皆々一同に肝心の御用をさつぱりと忘れて少しも覺えず。」

といふ是を聞いて三人の主人大に怒り、吾々三人こそ人も知る世に物忘れなれ、汝等こそ覺えも居べきに是を忘るゝとは不埒なりと大にのゝしりければ、家來一同に恐れ入りながら言葉をそろへて、

「中々左やうな物覺えが私共にあれば彼方がたに御奉公はつかまつらず。」

と申せしとか、誠に此の咄しの如く君忘るれば家來も忘れ、君君たらざれば臣臣た

らず、父父たらざれば子も子たらず、曾子の家には不孝の子なく盜跖の家には善人なきが如く我が恩義を忘るゝ家には又恩を思ひ義を思ふの子なく臣なし、此の恩を忘れ義を忘るゝ心こそ我が身を忘れ其の滅ぶるを忘るゝなれ、此の忘るゝも忘れぬも誠の一念にて身も立ち家も起るべし、忠臣は主人の爲めに身をも妻子をも忘れ、孝子は親の爲めに我身も財寶も忘れ、貞女は夫の爲めに身も命も忘れて以て道を全ふす、是を思へば忘るゝも忘れやうによるべし、又忘れぬも忘れぬの覺にもよるべし、其のよき勤め事を忘れて日夜色や酒や遊興氣隨氣儘を忘れぬ息子や番頭の物覺えもあり、手には珠數をかけながら後生の事は忘れきつて聟や嫁をいぢりまはすことを寢た間も忘れぬ物覺えのつよひ舅姑もあり、我身の職も義理も忘れきつて疑ひ出すと何ケ年前のことも忘れずに心の角をふり立つる物覺えのよい恪氣しつとの嫁もあり、大切の親や妻子を忘れて道ならぬ女許りを一刻の間も忘れざる物覺えのつよい聟もある、茲を思ひますれば忘るゝ忘れぬも道二つ仁と不仁のみ、人間萬事

誠といふ心の射前が正しければ忘れても道の正鵠を失さず、又覺えてもよく道の正鵠を失はず。

ある孝子の道歌とて、

よきことはわするゝなよとたら乳ねの
告げし惠みは世々にわすれず

是こそ誠のよき覺えといふのである、此の孝子の道歌を常に忘れずに誰もかゝる物覺えになりたきものでございます、けれども兎角小人は義を忘れて利を覺え、利に萬事をさとることかなしけれで、

世の中上下こも〳〵忘れぬは利よく色よく名聞酒食恪氣偏執などである、小人は是を忘れぬ故に身のほろぶるを覺えず忘れてしまふのである、蛙は蚯蚓を食ふ事を覺えて蛇にとらるゝことを忘れ、蛇は蛙を食はんことを覺えて猪にとらるゝことを忘れ、猪は蛇を食はんことを覺えて獵人にうたるゝことを忘れ、獵人は猪をとること

を覺えて我が身に怪我あやまちのあらん事を忘れおぼえず又覺えぬ、其の獵師を見て物の命をとるは殺生なり、末寺の事は忘れたりやと氣の毒がる和尚方に出家の出家たるの慈悲無欲佛恩を忘るゝの僧もあり、是等の僧を見て扨も〳〵あの出家も人品と學問はよけれども內心欲心名聞深く老ても凡骨離れざるこそ氣の毒なれと笑ふ在家の博學多識の町人も、肝心の其の町人の位に素して行ふの家業篤實謙遜を忘れちんぷんかんのみを覺えて高慢を發し、町人の町人たるの道をわすれ我かしこげに先祖の冥加を忘るゝ類、世には澤山ある事である、是は皆我心のくらくして誠ならざる所より他の非は見えて、我身に求むる事を知らざる迷ひである、又誠なる時は明らかにして他の非を知らず、只我事に求むるものである。

昔伊勢の國に山田某とか申せし富家あり、都方に至りし時不斗遊女にまみへしが此の女の色になづみ辨佞なるに迷はされて終に此の女をうけ出し國へともなひ歸り寵愛ならぶものなく何事も此の遊女が心まかせになして我が妻にはうとくつらかりし

此の某の妻は世にまれなる貞操にてかりにも悋氣の心なく、夫は勿論此の遊女をも深くいたはりしかど、遊女は深き奸佞の者にてより〳〵此の妻が事をまことらしくさま〴〵と讒言を申せしかば、夫も心くらみ情けなくも無理非道の難題をいひ罵り此妻を故鄕へ追ひかへさんとしけるに、妻はなく〳〵もその門を出んとす、時に夫此の妻がうしろかげを見て高聲に、嘸な汝は心のうちに我をうらむならんと申しければ此の妻夫が方を見かへり目に淚をうかべながらもいんぎんに手を突きて、

すてられしうきを忘れてわすれなよ
たのみし君が深きめぐみを

とよみしかば夫是を聞くや否自ら走り出て妻の手を取り奥にかへし淚と共に申しけるは、常に御身が賢貞なることは知りながらも、よしなき惡女の色におぼれ迷ひて賢き御身を追ひうしなはんと、さま〴〵うきつらき目を見せたれど更に人のつみをとがめず只々我身に求めかへりたる其の堪忍世に又となし、殊に只今の一首の實情

かゝるつらき夫にあひても其の我がうき事を忘れて今まで頼みし夫のめぐみは忘れじとの志ひとへにありがたくもかなしきことにこそ、何卒我がつみをゆるして永きちぎりをこめられよと夫は妻の貞心に眞實其の非を過てあらためけるぞ世にたのしき極みなり、夫猶も妻に向ひて申しけるは我久しく汝とそひて常に汝が世にかしこき貞節なるは知るといへども人の凡情にて少しは嫉妬もあるべし、又はらだちもいかりもあるべき筈なるに今日の世にかなしくせつなき時に望みても斯る優美の其の誠あり、世にかくもよく堪へ忍びたるは如何なる術ありての事と感心のあまりに尋ね申すなり、我が爲めに心得になるべきの心持を包まずさとされよといふ。妻は夫が本心に立ちかへりしに嬉し涙にせきあへず、殊にしたしく夫なる人のよく堪へ忍ぶの心得をさとせよと、尋ね給ふにかたじけなさのいやまして思はず今は聲を放ち身もうち倒れて泣き入りしかば、夫驚き是を助けてさまざまに介抱しければ妻はようやく涙ををさへ、ありがたき御言の葉の數々に思はず我が母なる人の我を

いつくしみ給ひしことを思ひ出ではからずも取りみだし御無禮の段をゆるし給へよ其の譯と申すは私儀は四歳の時に父なる人にをくれまゐらせ、世に力なき身にてありしを母なる人の操正しく我を敎へて人となし給ひしあつき惠みにあつき苦勞は申すもなか〳〵つくすまじ、我緣ありて君が家へ來るの儀とゝのひし時に母我に向ひの給ひしは汝幼きより母が手にのみありて外を知らぬが故に何事も行き屆くまじ、故に汝に敎ゆる五つの大事あり。

其の一といふは汝は親の家を出て夫に嫁し再びかへる家はなし、此の心得を一とせよ、扨又其の二つには舅姑を眞實の親と思ひてよく事へよ、能く夫の心にかなふとも此の兩親の御心に叶はざれば女たる人の道にあらず、扨その三にはかりにも夫のよしあしを見ず、何事も我身に立ちかへりて如何なる事のありとても恪氣嫉妬せぬものなりと深く心を慎むべし、此の心を定むるが大事なら必ず〳〵心を狂はすことなかれ、扨又其の四つには老人たりとも出家たりとも男子たる人と夫、居給はざ

る席にてなれ〳〵しくもうちとけて物語すべからざること女第一の慎みなり、夫婦でさへも別あるの古人の敎へ、まして餘の人をや、此の儀大に恐れつゝしむべし、扨又其の五つには只何事も常に深く堪へ忍びかりにも女は柔和をうしなふ事なかれ又人の我身につらき事をなしなば是人のつらきにはあらで我が前生にて人につらきことをなせし報ひなりと思ひて我身に立ちかへり、人の我につらかりしを忘れて我又人につらきかへしをなさばまた〳〵來世にて此の報ひあるべしと觀念すべし、嗚呼汝此の五つの大事を忘るゝことなかれ、此の中一ケ條にてもかくならば母は其のまゝ勘當なりと申し給ひしを、たゞ〳〵あり難く思ひて君が家へ來りても恐にも是を常に守りしが、或年母が家に至りし時に母我にの給ふに汝我が申さし五つの戒を守るや否やと尋ね給ひしに、我申すに不及も慎みはべれど、右五つの敎の中に舅姑に事へまゐらさんと欲すれども、我家は夫のみにて御兩親は我がいまだ嫁せざる前に過ぎ行き給ひしかば、此事のみは其のかひもなく侍るなりと申上げしかば、

母大に御氣色をかへ給ひて、扨も〳〵をろかなるかな、汝が言葉其の兩親の世にいまし給ふ方に事ふるよりも世になくて佛壇にいまし給ふの御舅姑への孝行は大事なり、御存生の人には其の人のこのませ給ふ御品御食物などすゝむれば心安くもよろこびもし給ふべきが、佛となりて居給ふ御兩親をよろこばし奉る儀は中々かたく難かしきなり、其の故は食物財寶にては悅び給はず、只々我が眞實の誠の心にあらざれば御悅びはし給はぬなり、故に汝よく〳〵相慎み萬事誠心を以て事へ奉るべし又存生の人には蔭日向の事へもなるべきが、此の世になき神靈の父母は日夜朝暮見通し聞通しなれば、汝其の見ざる所を慎めよ、其の聞かざる所を慎めと大に敎訓し給ひしもありがたき。

然るに君も知り給ふ如く、母七とせ先の秋の末不斗病の床につき給ひしが、次第に御身おとろへ給ひ世にくるしげなる中にも我が手をとらせ給ひ、兩眼に涙をうかべ給ひておん身は幼くして父君に別れしかば父にも母にも我ひとりを力ぐさにて成人

母ひとり子ひとりなれば寢たまも互に思はぬ時はなかりしも無常の使是非もなく我はこの世をかぎりとす、嘸な此の後はおん身がひとり世に力なく過ぎ給はんことのかなしくて死する命は露もおしからねど、わかるゝ道のなげかしさよ、只此後は殊に猶夫なる人を大切にむつまじく夫に如何なる無理難題のあるとても、只順ふが女の身と我を敎へし五つの戒に順ひ、よろづの事を堪へ忍び給へよ、人は只堪忍をなすばかりなり、此の堪忍の積りし人こそ人の人なるぞと御くるしみの中にも筆をそめて堪忍の二字を短冊にかゝせ給ひて其もとに、

たへしのぶ心しなくば皆人の
など身を立る事のあるべき

此短冊こそ我が長きわかれの形見とも、又おん身が生涯の守りともし給へよ、人は只々堪忍をいたす事にて佛も忍の德たることを示し給ひ、夫子も一言にして身を治むるはそれ堪忍の事なりとの給ひ、又此世界を娑婆せかいといふ娑婆といふは天竺

言にて是を飜譯して見れば堪忍といふ事なれば、汝も我がなき後のうきにつけつらきにつけても此の堪忍こそ我が母なれ此の堪忍にそむけばすぐに母の勘氣勘當なりと思ひ給へよとの給ひしも永き別れの形見となりぬることのかなしさよ、今日君が不興をうけて出る身のまたふたゝび歸りてかゝる嬉しき身となるも、是皆母が御形見の御慈悲にて其の身は此の世を過ぎ給へど心は我身につきそひ給ひて守らせ給ふと思ふにぞはからず無禮もなし侍る、又我身よく堪へ忍び候の術もやあらん、ありのまゝに語れと仰せ給ひしに今こそ此のわけ申し奉ることなれと、猶も深くぞ落涙しけるに夫某ます〳〵大に感涙し、此妻なる人の芝蘭の室に我が身も共にかうばしく飽魚とひとしき惡心の彼の遊女を追出し、此妻とむつまじく家を修めしかば子孫めでたく榮えしとなり、是道二つ仁と不仁のみたつた西むくか東むくかの一足にて一念遊女にまよひて家も身も失はんとせしも、又貞女が一言に一念をひるがへし一足を正路へむけし一歩より其誠の射前正しくなりて我身に子孫榮ふるの正鵠にあ

たりしも、たつた一念我身に求むるか外に求むるかの一足なり、誠に此の貞女がにくゝつらき夫をうらみざるは弓いる君子に似たり、其正鵠を失ふ時は反つて我身に求むと只々己が身にのみかへり見て人の悪を忘れ、我恩に着しことのみを忘れまじと、

すてられしうきを忘れて忘れなよ
たのみし君が深きめぐみを

とよみしは心の射前の誠より正しき矢のはづせし言の葉に操にかたるも實にありがたき自然の徳にて古人の道歌にも、

慎を人の心の根とすれば
言葉の花も誠にぞ咲く

誠にかくれたるより見はるゝはなし、我心に悪心あればかくすとも是れあらはるゝなり、心内に奸曲あれば自然と起居ふるまひ物いふにも其の奸曲のあらはるゝなり

一念欲心邪心あれば忽天道是を知りて罪し給ふなれば、世の中に物をかくし悪事をなして知れぬと思ふ程の愚はなければ、各々方も只々物を包まず隠さず只人はありのまゝほど世に安樂なることはあらじ、如何やうに悪心をかくすともなどか知れざることあらん、天知る地知る我知る如何ぞかくす事のなるべきや。

鯡仔の極樂參り

昔或る人が死んで極樂へ參つた觀音樣や勢至菩薩のお出迎へ、やがて阿彌陀如來の御前へ案内されると如來の仰せに「其方も今後極樂の仲間入りをするのじやから此方の樣子も一通り見覺えて置かなければならぬ、今日は先づ見物をしたがよい」とのことで案内の役を觀音樣に命ぜられた。

觀音樣は委細承知と彼の亡者を引き連れて其處此處と極樂の有樣をお見せになる、七寶壯嚴目を駭かし天人の舞樂耳に充ち、八功德地には蓮の花盛り、伽陵頻伽の囀る聲は鶯よりも面白い、彼方此方と見物する中一つの堂へと案内された、見ると層屋の藏の中のやうに四方に棚を吊り廻して夥しい木茸や鮒仔が積み上げてある、亡者は「はゝあ百味の御食を調進するお臺所だな」と獨り合點をして觀音樣に「あの澤山な木茸は佛がたがお食りになるのでございますか」と聞くと「否々あれは木茸ではない、あれは娑婆にゐた時常々忠孝の咄を聞いて成程と思ひ又談義說法を聞いてあり難いと思ふたけれど身に行ふ所作は惡いことばかりといふ、そんな人間が死ぬと體は無間地獄へ行つて耳だけが極樂へ來る、あれは耳が佛になつたのじや」とのお說である、亡者はいとゞ感心しながら、

「耳の干物は聞えましたがあの鮒仔は極樂に不似合なもの、あれは何うした譯でございます」と尋ねる觀音樣は、

「滅相な極樂に腥いものがあつて堪るものか」とお叱りになつて、

「あれは鮒仔ではない、娑婆にゐる時口には忠孝を述べて人を敎訓し、經論を說いて人を濟度し一廉の學者智識になり澄ましてゐながら其の身の行狀は氣隨氣儘を勝手に働く、そんな奴が死ぬと體は忽ち地獄へ落ちて舌だけが極樂參りをする、あれは舌の干物じや」何と怖い話ではないか、感心上手の行ひ下手口ばかりの龍頭で尻のないのには困つたものである。

不調法者

京都のある絹屋に家内大勢暮す内、半季居の飯焚きにお杉といふて眞實につとめた人がある、家内中の不調法を自身獨りして引きうけてゐた、南京の鉢がわれてある是は誰がわつたぞ、お杉が出て、ハイ此間私が不調法でわりました御免なされて下さりませ、其後又重箱の緣がかけてある、お杉が出てそれは私がかきました、又

我が悪い
我が悪るい

旦那の衣服に油がかゝつてある、誰が此様なことをした、お杉が出て私が麁相でございます御了簡なされて下さりませ、旦那が奥様に扱々今度の杉はきつい麁相ものじや能くいひ付けさつしやれと旦那の不機嫌な、ある時床の間の壁に疵が付いてある、旦那は大きに立腹して誰かれと吟味すれど仕人がない、時にお杉罷出て私が不調法で疵を付けました御免なされて下さりませ、旦那大きに腹立て其方は來てから間もないが度々の不調法麁相といふも程がある、此方には得つかはぬ程に勝手次第宿に引けといひ付けらるゝ内に七つばかりのぼん様が出て床の壁は私が先度疵付けました杉じやございません、そうすると丁稚が出て先日の南京の鉢は私がわりましたお杉どのじやございません男衆が出て重箱の縁は私がかきました、又女中衆が出て此間旦那様のお小袖の油は

私がかけました、と皆銘々白狀して出る、家内中がお杉どのゝ善に化せられ我がとがを我が手にいふて出るやうになつた、此のお杉どのが其の家に八年つとめて奥様の病氣の時の介抱晝夜暫も側を離れずのこる所もなきつとめ方、奥様の遺言で其の飯焚きのお杉どのが其の家の奥様にならられた、それから其處の家が能くをさまり此のお杉どのゝ善に化せられ一家中睦まじうなつて今に其の人がゐらるゝといふことである。

是等が眞實をつとめる根づよい奉公人といふものである。

安藝愛山の教育道話にも一家が仲睦まじく暮せるも毎日喧嘩の絶へざるも相讓り合ふの德あると無きとに歸す己れが〳〵と自己中心主義を張りては狗の寄り合の如く嚙み合ひは絶へず人間の社會は獸類の仲間とは異なる辨別を要す。

或る村に二軒の家あり一軒は家族少くたつた三人暮しなるが毎日家内喧嘩は絶へず又一軒は七人の家内あれども睦まじくして物言ひごとあることなし、一日三人家内

の主人は七人暮しの家に到りて「お前の家は大勢の家内なるが喧嘩ごとを聞いたことなし私方は家族少きも喧嘩を爲さぬ日とてはなし何うしてお前の方は家族其のやうに睦まじく暮せるか。」

と問へば七人暮しの主人曰く、

「それは私方は惡る者共の寄合にして貴家の方は善き人ばかりのお揃ですからのことでしやう」といふより三人家内の主人ます〳〵合點行かす「それは意を得ぬお話し七人も惡る者が寄り合ふて居ればます〳〵喧嘩は起る譯合なるに惡る者ばかりなる故に喧嘩がないとは何ういふ譯であるか」と問ひ反へすと七人家族の主人は曰く

「否何も不審はありますまい私の家では火鉢が轉んでも茶碗が割れても皆々の者がそれは私が惡るかつた私が粗末に置いてたから割れたのだ、私が惡い〳〵と家族が互ひに我れ先きにと惡る者になるに競爭する、それ故に喧嘩の起りやうもないがお前さんの方は此の反對に何か失錯でもあつたなら皆樣が善き人にならうとせられて

己れは知らぬが貴樣は惡いぞといはるゝでしやう、火鉢が轉ぶと貴樣が茲に置いてあつたから己れがそれを蹴倒したは無理はない、暗がり間へ物謂はぬ火鉢を置くやうな、馬鹿があるかと火鉢は倒しても善い人にならるゝでしやう、茶碗が碎けた時でも元來棚の構造が惡いから茶碗が落ちて碎けた、棚に置いた己れには失錯はないが誰がこんなに粗末な棚を造らしたかと叱り立てられて貴方は茶碗を碎いても善い人になられましやう、それで喧嘩は絶へぬ、私方が惡る者ばかり揃ふて喧嘩が起らず、貴家が善き人のみのお寄合の故にお物謂が毎度起るのでしやうと想ひます」

と敎へられ三人家内の主人始めて目が醒めて實にもと感心して遂に此の德に化せられ爾來互ひに自己の張り合を止めて相讓り合ふ德を養ひ此の家も遂に圓滿なる和親を結ぶに至りしとか。

更に一段の美談は或る家の主人一日井戸端の樹を斬りたるに過まつて大きい枝を斬り落したるが井戸の龜石には妻が鍋を洗はんとして出しありたれば枝は鍋に當りて

碎けたり、主人は樹上より「己が失錯だ」と呼ぶと女房は「否私が速く取り入れて置かなかつたのが惡いのです」と夫婦爭ふて罪を吾身に負はんとする、時に姉は飛んで來りて「否々それはお前達の落ち度ではない年寄の役に早く私が氣を附けて遣るべきを年甲斐もなく注意を爲さなんだ故に鍋も割れたれば惡る者は此の婆々である、お前達に心配をして貰ふてはならぬ」といへる話あり。

然るに世間の多くは自己が善人たらんとするより兎角爭ひが起るのである、私が惡るかつた私が惡るかつたと惡いものが揃へば一家は何時もニコニコとして笑ふ門に福來ることは請合ひです。

心の安否

人間は只身一つを以て立つものゝ如しと雖もその實は心と身と二つのものにて立つものなり、而して身と心とは何れが貴しといへば、心は身の主人ともいふべきものなれば、心の方、身より貴きこと勿論なり。

身は大切
あさるべく候
心は大切
なさるべく候

然るに世人は曾て知懇の人にて久しく遇はざりしものに遇へば必ず互ひにその安否を問ひ尋ね「久しくお目にかゝらざりしが身體に變りなきや否や」とか或は手紙の末文には、

「御身御大切になさるべく候」とかいふて何人でも「御心に變りなきや御心御大切になさるべく候」といふものはない而して其の變りなきを聞くや人皆喜べども若し其の變りありしを聞けば其の人の爲め深く之を悲み憂ひて其の回復を祈らざるはなし。

此の如く身の安否を問ふは固より當然のことである、既に當然のことゝすれば此の身より更に貴き心の安否はなほ更に問はなければならぬ、即ち久しぶりにて舊知の人に遇へば、よろしく當さに足下は身の健全と共に、相變はらず心も健全にて曾て

不正直病といふやうなる心の病に冒されしことはなきや、幸にかやうなる病に罹りしことなければ先づ以て珍重なれど、若しも不幸にして、これ等の病に罹り臥床の上にて其の夜具の影に對して恥づることもあらば、そは氣の毒の限りなれば心の養生專一にて、とく不正直病の回復を祈る等の語をもて之が挨拶を爲すべし、かく互ひに其の心の安否を祈りあへば多少心の安全を得るに近し、然るに世人皆よく其の身の安否を問ふことは知れど而かも其の心の安否を問ふことを知らざるは甚だ痛歎の至りである、乞ふ世人身の安否を問ふべきこと勿論なれど心の安否は更に一層注意して之を問はんことを心掛けたいものである。

心の過失を去るべし

人の行ひなるものは、若し精しく之を別てば口の行ひと身の行ひと心の行ひとの三つに分つことが出來る、皆よく之を修めなければならぬ。然るに之を口に言ふことはよし、如何なる善事にても敢へて難きにあらざれども而かも之を身に行ふといふに至りては、なかなか難きものである。されど身に行ふはなほよく之を爲し得れども、之を其の心の中に盡すといふに至りては、いよ〳〵難きものである。故に之を口に言ふは之を身に行ふに若かず、又之を身に行ふは、之を心に盡すに若かざるなり。

過ちを二たびせず

されば口に恥なしといふは、身に恥なきに若かず、又身に恥なきは其の心に恥なきに若かざるなり。されど人は口に過ちなきことは、さして難かしきことにもあらず隨分つねづね立派なることのみ言ふことを得れど、さて其の身の過ちなきに至りては、なか〳〵に難かしきものにて容易には爲し難きものなり。而して其の心の過ちなきに至りてはいよ〳〵難きものにて殆んど常人の爲し能はざる所に似たり。され

ど此の心の過ちにして去る能はずんば、彼の孔門の顏回が過ちを二たびせずといふが如きは、これその口や身の過ちといふにてはなし、顏回は亞聖ともいふべきものなり、その口や身の過ちなきは勿論にて曾て一たびも口の過ちを犯し身の過ちを犯したることなければ過ちを二たびせずといふの道理もなし、こは是れその心の過ちをいへるものにて顏回ほどのものにても、その心の過ちは一たびは犯したるものなり、されど流石は顏回なれば其の後深く愼みて二たび心の過ちを犯せしことなしといふにあり、これにても心の過ちを去るの難きを知るべし。

人それ心の過ちを去るの難き、已に此の如しと雖も而かも口と身と心と三つのものみな能くその過ちを去るにあらずんば完全の人といふべからずとせば、勢ひ已むべきにあらず、如何に難しとも一念心の中にきざす未發の過ちを去るべし。此の如くにして能く其の心の過ちを去らば身の過ちは深く求めずして自然に之を去るを得べし、而して身の過ち已に去らば口の過ちは亦從つて去るべし。

習慣

心の着物

人の習慣なるもの、初めは殆んど色なき空氣にも均しく、その習慣たるを知らずと雖も、而かも一たび爲し二たび爲し三たび爲し四たび五たび爲すに及びては一の習慣となりて、最早動かすべからざるに至る。之を物に譬へていへば習慣の初めに於ては、その力の弱きこと恰も蜘蛛の糸にも似たれど、而かも四たび五たびの習癖を爲すに及びては恰も鐵をもて繫ぐが如く亦得て動かすべからざるに至るべし。

故によき習慣ならんには、これ程幸福なることなしと雖も、若しそれ惡しき習慣ならんには、又これ程不幸なることなし。何ぞや一たび身に就きたる習慣は、亦容易にかふべからざればなり。故に人は常に善き習慣を作らんと深く注意して言動する

の習慣を養はんことを要す、これ極めて肝要なることなり。

米人ジョン、トッド氏曾て習慣の大切なることを論じて曰く、

「今もし人に向つて汝の欲するところの斧を擇べよ、但し終身用ゐて亦變ふべからずといはゞその人は細心注意して利器の上にも更に又利器を擇ぶべし。又汝の衣服を擇べよ但し生涯着て亦變ふべからずといはゞ、その人必ずその縞柄及び品質等を吟味せんことといふまでもなかるべし。然るに獨り怪しむ、人間の習慣に至りては一生之を着て亦容易に脱ぐべからざるにも拘らず他人その撰擇に注意するもの甚だ少きにあり。それ習慣は心の着物なり、一たび被るときは、また再び之が着換へを爲すこと極めて至難なり。況んや身體の着物ならば、よし腹掛手甲など、賤しき服裝を爲したりとも後に上品なる美服と着換ふること、亦容易なれど心の着物たる習慣は、かゝる自由のきかざるをや。深く注意に注意して善き習慣を撰ぶべし」

と亦金玉の敎へといふべし。

善き習慣を形づくらんと、謹んで心を用ゐるの習慣こそ、最も善き習慣なれ。

四方の海
皆はらからと
思ふ世に
なぜ波風の
たちさわぐらむ

同情の美

同情は社會結合の楔子、されど、こも亦自己を中心として發足、同情の最も痛切なるものを親子の關係とす、燒野の雉子夜の鶴、何れの處にか子を思はぬ親やあるべき、親は子の爲めに隱し子は親の爲めに隱す、直きこと此の中にあるが人情の美趣、而して之れ最も自己の接近せるもの、更らに兄弟の相愛に至りては情もとより親子の如くならずと雖も血は水よりも濃し。同情の强弱亦他人と等しからず。夫婦はもと他人合して一體となるや、戀愛の之れが媒たるや云ふまでもなけれど、其の和合を美ならしむる所以のものは此の同情に外ならず、殊に老いては戀愛の情衰ふれど

も、半生共棲の追懐は更に兩者の同情を深からしむるものあり。家庭は此の同情に結ばれ、相互に自己の幾分かを讓歩する中に圓滿を計り得べし。鄕黨隣里との交りも亦此の同情によつて美はしく、進んで國家社會を形成するや、吾等は之れによつて生命財産自由の安固は保障せられ、これによつて獲得したる權利少からざれども亦之れによつて負はされたる義務の更に大なるを思はざるを得ず、權利は自己の擴張たり得るも、義務は自己の制限なり、沒我なり、此の沒我あつて公共の利益は企圖せられ、此に美はしき國民道德となり、終には其の鄕國の爲には自己を沒却して顧みざる殉國の芳躅を貽す、若し夫れ此情の國土を超越して、普く世界の人類に及ぶに至つては博愛の精神は徹底し、仁慈の美は窮極に近し。

明治天皇の

四方の海皆はらからと思ふ世に
なぞ波風のたちさわぐらむ

一首、世界を感動せしあし所以のもの、實に此の人類相愛の美に發したる金聲玉振たるに由る、相爭へる人類の一面には此の美はしき同情の理想あり、此の心一切の生物に及びては、空飛ぶ鳥、野を驅ける獸、さては眼前の一小虫にも、一茶の

我と來て遊べや親のない雀。
やれ打つな蠅が手をする足をする。
寢返りをするぞわきよれきりぐす。

となりて、其の人格を相望せしめ峰頭の松、路傍の花に及びては、詩人の錦腸を動かして天地を美化し淨化す、釋迦が慈悲を提唱し、孔子が仁を敎示し、基督が愛を宣傳するものもと人の心の醜所惡所を照破せんとするものなりと雖も、其の慈悲といひ、仁といひ、愛といふもの亦實に人心秘奥の要求より叫び出されたる聲に外ならざるなり、誰か人心を醜と呼び汚といふ、相爭へる人の心は確に此の美所あり、淨所あるなり、人の心の美所淨所は之れのみにあらず、人は皆眞を求むるの心あり

人心の慾求は虚偽を憎み、譎詐を嫌ふ、時に名利の爲めに昧まされて、虚偽を行ひ譎詐を事とするも、之れたゝ其の外面の糊塗にして、内心には詐るべからざるものあり、此の詐るべからざるもの發して、自ら其の糊塗を剝して欺くべからざる我が眞相を暴露す、犯罪者の巧妙なるもの再犯加重の刑を恐れて偽名を以て刑を受け、初犯の如くに裝ふ。烱眼なる司獄管は之れを洞察して、彼れの不意に乘じて突然其の名を呼ぶ、囚人此の一刹那考慮を容れず「ハイ」と應じて、直に化の皮を剝さる此の考慮を容れざる一刹那は人心秘奥の欺くべからざるものあるを證するにあらずや、西洋の御伽噺は一條の笑話を傳ふ。ある小さき村に一人の寡婦が大切に飼うて居つた鶏鳥を盗まれたことがある、何も村の者の仕業に相違ないといふので、其の調べ方を御寺の坊さんに頼むと、其の坊さんは早速村中に相談したいことがあるから明早朝村の者は皆寺へ集つて呉れと觸れ出した、何事か解らぬから村の者は皆其の寺に集まると坊さんは一座を見渡して、

「これで村の者は皆揃つた」かといふと、

「ヘイ〳〵皆揃ひました」と答ふ、

坊さん不思議さうに、

「まだ鶏鳥を盗つたものが來て居らぬ」といへば此の一刹那一人の男は、

「ヘイ此處に居ります」と、

欺くべからざる心裏の聲は、自ら詐らんとする作略を勃跳して公衆の面前に躍出す

世に人心の機微ほど面白きはなし。

德孤ならず必ず隣あり

むかし都にありがたしの吉兵衛と異名せる、翁がありましたが、常に足ることを知り天命に安んじ只何事もありがたし〳〵と悦び世をのどかに暮して居つた、或夏の日人が來て、

「さて〳〵今日は暑き日である」と申せしに吉兵衛答へて、

「暑き時は暑きがありがたし寒き時は寒きがありがたし」と申して一人よろこんで居た、又翁は貧乏にて不自由ならんと申せば、

「美食も女色もせぬ故にかく長命なりありがたし〳〵」とのみ申された、或時外へ參りて其の歸りがけに門口の柱で思はず頭を強く打つたが其のまゝに「ありがたしありがたし」と申したから傍の人々が肝をつぶして、

「吉兵衛どの、ありがたきも事による、痛みはせぬか」と尋ねければ吉兵衛顏をしかめ、

「扨々いたや、ありがたや、いたありがたや〳〵」と申しけるに人々は、

「痛まなければありがたいだらうが、其の痛むのがありがたいとは如何に」と問ひしかば吉兵衛が申すに「さればの事に候此の痛むが誠にありがたき所で、今頭を打ちし時に頭が碎けて命なくば痛むことはあるまいに命も頭も無事なればこそ痛むのである、あゝありがたし〳〵」と申されけるを此の家の隱居學者なりしかば是を聞いて感心いたし、

「扨も〳〵ありがたや今ぞ悟りを開きたり、我兎角世の世話多く、うきことつらきことに度々あひて心の痛まぬ間もなく、扨も〳〵くるしき事と世を厭ひしが、此の心を痛むるも命があればこそと悟ればありがたし〳〵」と、

此の吉兵衛が德は孤ならず隣して大安樂に至られしとか、各々方も足ることを知りかりにも不足の心を生じられざるよう、

月かげのいたらぬ里はなけれども
ながむる人のこゝろにぞすむ

世の人雷氣瓦斯燈のあかりは誰も明らかなりと知れど、日月の光りは皆忘れて居るが如く、泰平の御恩や主の恩や、親の恩は廣大なる故に反つて忘るゝやうなものにて、人の心は只々何にか事が出來るとこまれども無事な時はあり難がらぬものである。

世の人皆常のありがたさは知らず、少しにても己が勝手にあしき事があると散々に不足のみを申しますが、實は不足が出るのは皆ありがた過ぎるから出るものでございます、其の譯は先づ一番に不足をいふものは大恩のある主人か、親か又一家一門か、他人ならば世話をして呉れる人か恩のある人でなければ不足はいはぬものである、其の證據は終に近付でもなき見ず知らずの人に不足をいふためしもなく、誠に不足が出るならば是は元來ありがた過ぎるからであると、我が身の上に立ちかへるがよい、何かにつけて人は三足我が身に立ちかへるの堪忍と、只足ることを知るのが肝心肝要である、實に不足の起るのは偏に皆ありがた過ぎるからに違ひはない、

曾て或る男が三人連で江州へ參りしに途中にて三人共に空腹になり、一同大いにこまつたが懷中した田螺の干したのを出し是をしがみやう〳〵と一里許り行つた、其所の藁屋に一せんめしと書いてあるのを見て悅び、大に力を得て走り入り老媼に向つて、

「婆さん〳〵茶も菜も何んにもいらぬ、早く一膳出してお呉れ」と急こんで申したから老婆のいふには、

「御飯は只今たきかけて少しひまがとれます、あり合すのは昨日の冷飯です」と答へけるに三人とも口をそろへて、

「昨日の冷飯でも一昨日のでも又二ケ月三ケ月前の飯でも苦しくない、早く〳〵出してお呉れ、すでに命もかたぶきぬ」とぬるき茶にて冷飯一膳づゝ食べたが、そのむまみは生涯に覺えないとのこと、然るに人の心は可笑しきものにて田螺を食ひし時は何の不足も出なかつたが、一杯食つて一杯だけ腹が膨ると早一杯だけの不足が

出て、

「これ〳〵婆さん餘り茶がぬるい、せめて豆腐でもないか」と不足をいひ又二はい食へば二杯だけ腹がふくれ、

「これ婆さん茲は湖水に近いに鰻でもありさうなものだが、扨も〳〵たしなみのわるいことである」と不足を申し又三杯食へば三杯だけの不足が出て、

「江州米と申すのに何と此の家の米はわるいじやないか、これまだ飯はたけぬか」と不足をいひ四杯食へば四杯目には、

「おい某殿此の飯は可笑しい米じや、食ふに順ひ腹がふくるゝやうな」と不足を申し五はい目には、

「私が今一里半行けばよい料理する茶屋があるといふのに埒もない、全體君達が食急ぎ致さるゝから困る」と不足をいひ六杯目には、

「これ某氏此の椀や膳の禿むさく、きたないことは何うしたものじや、神代からの

所持かも知れぬ」などゝ惡口をいひ七杯目には、

「その膳椀のむさきよりは、私はあの老婆の色の黑いのとし、わの多いのと、顏と衣服の垢づけるのを見れば、心もむさ〳〵して、胸が一杯になり、腹がふくれても う一口も食がすゝまぬ」などゝ不足計り其の筈じや七杯の八杯のと食つた事は忘れての不足も皆腹が膨れ難儀のないから起り、あり難すぎるからの事だから各々方もすべて世の中古今ともに此の通りと思つて忘れ給ふな、或る道歌にも、

奉公の始めの心わすれずば
何の不足も世にはあらじな

嫁入りの其日の心忘れずば
聟しうとめにきらはれはせじ

聟や嫁もらひし時の心なら
おにばゝなりと人は申さじ

いかにも世の人皆其の始めの心を忘れ失ひ奉公に出し時の其日の嬉しさありがたさは追々すゝむに順ひ自然と忘れ、何時となく只々不足のみ多くなるものである、又聟も嫁も來りし日の始めの心は何卒々々大切に我が身を慎み何事も堪忍し如何なる不自由も忍び相續をなすべしと思ふ外に餘念なきが、次第に居なじみ勝手を覺え自由が出來ると、此の家に我があればこそ、などゝいふ心から、さまゞの不足が出て、我と我が身を失ふのである、又舅や姑としても、嫁や聟を貰つた時の心は何事も堪忍致し、他人をもらへば何事も大目に見て堪忍せねばならぬの、必竟は夫婦の中さへよければ申ぶんなく、私はすぐに隱居の安樂世界などゝいつた舌のかはかぬ中に、嫁や聟が居なじむと早どうのこうのと、不足が出て火宅の世話に修繕をもやし、瞋意のほのふに、吾と我が身をやき亡すのも、元は是皆足ることを知らぬと、三足我が身へ立ちかへる堪忍を知らぬ故である。

はら立て火宅の世話をやくうちに

我が身は灰となるを知らずや

皆此の灰となる身なるを知らずに欲にふけり、色におぼれ、酒食をむさぼり、喧嘩口論悋氣短氣一朝のいかりの火にて其身ばかりか親族までも類燒させるのである、故に寒山の詩にも、

——瞋は是心中の火能く功德の林を燒く菩薩の道を行はんと欲せば忍辱眞心を護れ——

とあるから、兎角堪忍を守り其の獨を慎むがよい、自分がよくしたのに人が惡るくするといふことはないものである。

よしあしの人にはあらで我にあり
かたち直ふてかげはまがらず

吾鏡にむかひて、にらめば影もにらみかへし、吾笑へば影も笑ひ、吾手をふりあぐれば影も手をふりあげ、吾平伏すれば影も忽ち辭義をするものである。

よしあしの移る姿の影法師

よく〳〵見れば我が姿なり

善惡邪正禍福苦樂皆我が一念の心得にて、人にはあらで我にあることはりを知ることであります、誠なるより明らかなるはなしと、多くの人中でも話をよく聞く人とよく聞かぬ人は自然と現はれまして、少しも隱すことが出來ないのが、人の性善の德でございます。

なきなぞと人にはいひてありぬべし

心の問はゞいかゞこたへむ

吾は知らぬと想へども天の見る目を如何であざむかんや、人の知らぬの、人の見ぬ中などと、いふはおろかである、人は知らぬと思へども吾我がことを忽ち知る、此の知る心が卽ち天知り地知るの心なれば、かりにもうそ、いつはりをせぬものである、誠がなければ何程賢くも、器用利發にても巧言令色の上皮のみにて、やくにたゝぬことであります。

何事も心のうちの誠より

思ひたゝずば末は通らじ

人は鈍でも、無學でも、文盲でも、唯正直に誠あれば神や佛も常にめぐみ給ふので、

心さへ誠の道にかなひなば

いのらずとても神や守らん

我が心に誠あれば自ら誠ある人のみ來れ、吾又心に誠を失ふ時は惡しき友のみつどひ來りて吾を失ふ、其の吾を失ふも、吾を治むるもたつた一念の心得覺悟にて善によるか、惡にそまるの道二つ、仁と不仁の一念のみである。

煤はきの人にたてたる据風呂に

よごれぬ旦那先きへ入りけり

かなしいかな此道歌の如く世界にはありがたき儒佛神といふ人の心の垢をおとし清浄になり、其本性にかへらしむるの据風呂を立て、小人凡夫の人欲のすゝによごれしものを此の教化の風呂に入れ、舊染の垢や、汚れをおとし給ふの慈悲の湯には反つて小人凡夫の人欲の垢の多く、心のけがれむさ〳〵きたなきものなどは嫌つて入りかね、賢はます〳〵賢にして、よき人の心清く人欲のなきよごれぬ旦那はありがたがり、一番にすゝみ來りて此の教化の湯に入ります〳〵日々にあらたなるのである、小人凡夫は唯よき道の此の湯に入ることをいやがり、愚はます〳〵愚にして日々惡をつむこそかなしけれ。

子をおもふ親ほど親を思ひなば
世にありがたき人といはれん

昔法曹上人若くしていまだ俗たりし時、常に獵を好みしが、或時山を通り、女鹿を弓しぼり放つ矢に鹿は横腹を射きられしが、此の破れしきづ口より子鹿の三つ四

つ生れしを、親はよろめき倒れながらも、さも可愛げに涙をうかめ苦しげに舌をのべて子鹿をなめつ、ねぶりながらに死したるを見て思はず落馬し感涙し、親たるものゝ子を思ふこと畜生すらかくの如し、況んや我親の未來よりも吾をあはれと思ひ給ふこと此の鹿に百倍せりと、すぐに是より釋門に入り世にも名高き智識となれりと。

世の人の心は闇にあらねども
子をおもふ道にまどひぬるかな

各々方の父母をはじめ世の中の親たる人は皆此の女鹿の如く死す、夕にも又死したる未來からも唯我子可愛と慈悲の舌にて我子をなめつ、ねぶりつ、子の行末のよからんことのみ思ふが親なり、子は又親の心を知らず不實不孝の刄にて親の心をいためく〳〵て、つひに齡をちゞむるなり、杖と刄と異なることなく心を苦しめ痛ましめて命を取るも何ぞ刄に異らんや、かゝる大罪親殺しともいふべきの不孝不埒も其の

始めはわづかなる酒食の遊びが色慾となり、それより次第に金銀ほしき心より、法律にそむき、よこしま欲心人をあざむきおとしいるゝの非道に組し、その身を失ふも、あしき人に近より隣りして我が心德をおほふが故なり。

人ならばうらみもすべしいかにせん
我をすかすは我が心なり

吾をすかし敎へるも吾なり、吾と吾を導くも吾なれば、吾れ吾を善人となし、吾と吾をよき人にするほどの孝心は、存生の父母にも、又死したる親への孝行も、これに越したる道はなきものなり。

父母はすぐにこの身と知りて猶
吾と我身を善にすゝめよ

貞女

女は夫をもて天とすといへり、譬へば蔦葛の木に生ひ纏へるが如し、木盛なれば葛も最と茂り榮え、木倒るれば葛も從つて枯る、然れば我が心得違より夫の果報を敗り、夫の家を害はぬ樣愼み給ふべし、夫の果報を敗れば則ち我が果報を敗るなり、且心を專一にして一人の夫を大切にし、兩夫に見ゆるを最と恥かしく道ならぬ事といふ事を心に占めて思ひ入り給ふべきなり。

飛彈の國某てふ村長の家に猿の杖てふ者を持ち傳へたり、如何なる事ぞと問ふに昔此家の門の邊りに大いなる柿の木ありて柿いと多く實りけり、或日旨なる男猿に杖の本を取らせ、我れ杖の末取りて伴ひ來る女猿あり、男猿を木の下に待たせ置き我れ木に登り柿の實を採りて男猿に與へ、我れも食せんとにや枝に登り柿の實を採

りて居けるが、此の家の主人鐵砲もて唯一打ちに打落し、サテ木の下の猿を見るに此は夫婦の猿にて盲なる男猿を生育てんとて懸りけるこそ、愛しき事をしたる者かなと思ひて、盲たる猿を畜ひ置けるに妻の死を歎きけるにや終に物をも食はで死しけるとか、其の杖を見るに猿の持ちたる所本末とも細く穿てりとぞ、年經て久しく生育たるにこそ最と哀れなることなり、それより此の杖を家に傳へて子孫長く猿を取る事を禁じけるとなん、又浪花の某の宅に藏の腰板の離れたるを釘もて打ち付けるが、其の板の間に蜥蜴てふ虫のありて釘にて縫はれたるを知らでありけり、其の後此の腰板を改め更へんとて引き放ち見るに、蜥蜴の縫はれたるが手足のみ動きて生きてあり、此は先きの年縫はれたるにこそ、能くも死なでありけるよと見るに又一つの蜥蜴ありて餌を銜み來りて與へけり、よく〳〵見るに女の蜥蜴にてありける、先きの年より今日まで斯る夫を生育けんと見るに最と愛しうて皆涙を落しけりさて釘を拔き捨てたりければ喜んで逃げ去りぬ、其の家に夫に別れて數年乳母奉公

に來れる女ありけるが是を見て感じけるにや主人に暇を乞ひて國に歸り夫に添ひ遂げたりとかや、斯る賤しき獸昆虫などでさへ夫婦の情は清きものを人として情なからんは最口惜しき業にあらずや。

洗ひ給へ清め給へ

湯の盤の銘に曰く、

――誠に日に新にし日々新にし又日に新なり――

と申しまして、殷の湯王といふ聖人は毎朝湯を使ひ給ふ盥の縁に右の銘を記し、日日身の垢を洗ひ給ふ時に、心も其の如く舊く染みし汚れを洗ふべしと自ら戒め給ふ言葉で、實にあり難い事ではないか、誰しも風呂へ入り湯を使へば身も清らかにサッパリと快くなる、是は外が清らかになりし故外清淨といふもので、人欲身勝手の心の垢を洗ひ落し本心の光を出せば内が清らかになる、是れ則ち内清淨となるの

心學の洗張り 本心の湯のし

で内外一致して清淨となれば眼よりも人欲諸の汚れは入らず、耳よりも人欲諸の汚れは入らず、鼻よりも人欲諸の汚れは入らず、舌よりも人欲諸の汚れを請けず、身にも人欲諸の汚れを請けず、意にも人欲諸の汚れを思はず、所謂六根とも清淨となれば五臟の神君安寧にして天地の神と同根となり萬物の靈と同體となれば萬の願ひ一つとして成就せずといふ事はない――洗ひ給へ清め給へ――

誠に心の垢を洗ふはかほど迄潔き事なるを、世の人放心として居るは何事か、心に垢氣のない人は却つて洗ふ事をよく知れども、兎角垢氣の多い人は洗ふ事が嫌ひで段々積れば石鹸でもソーダでも落ちず、灰汁にでもつけねばならぬ、譬へていはゞ世界中は殘らず灰汁桶のやうな物だけれども、うつかりして居ると氣が附かぬ、

男女とも七歳より師を撰び手習稽古にやる、是は學校桶といふ大きな灰汁桶へつけ置いて不行儀な事をせぬ樣大垢のたまらぬ樣大口や惡口いはぬ樣おとなしく人らしい人とさせる灰汁桶で、それから少し年が長けると四書などを讀せるは心の垢を落し身の行ひを正しくするに至極の灰汁桶である、或は謠なども能く心を留めて會得すれば垢氣の落ちる灰汁桶で、諺に「人の形見て我が振り直せ」と人の善惡邪正は明らかに見えるもの故若し人の垢氣の多いのを見れば吾にも彼の樣な不義不埒の垢は溜りはせぬかと我が身に立ち歸り改め見るがよい、又人となり孝弟にして垢氣のない善き行ひと見たならば我も斯くこそありたきものと速に行ふがよい、是れ卽ち世界中が灰汁桶のしるしである、又女子方も縫針片手には躾諸禮式の稽古などは身を正しくする事故自ら心の垢も落ちて正しくなり、年頃にもなれば嫁入りして夫の家へ行けば夫はいふに及ばず舅姑小舅小姑などに事ふるのも灰汁桶の中に居るやうなもので、それは惡るい是はこふじやゝ氣を附けて貰ふ度毎に嬉しや、さま

〳〵の行き屈かぬ垢を取れと教へて下さると眞實にあり難く思へば心の垢がキッパリと落ちるものである、又世間を見れば稀には徒らな娘や、端手な内儀や、嗜み過ぎる後家などは見よからぬもので、皆心に垢の溜る故其の垢が身に顯れて浮名の立つ事もあるのである、必ず慎むがよい、其外繪双紙芝居まで皆勸善懲惡の趣なれば見やう次第で灰汁桶ならずといふ事はない、又家内では神棚佛壇も灰汁桶で、如何なれば神前佛前に向つて心の垢ありては神佛とも受け給はず、故に神佛に向ふ時は誰も暫く無心無念で心に垢氣が少い、其の外氏神旦那寺又は念佛、法談、說法、授戒等も心の垢を洗ふの外なしである、或る僧の歌に

煩惱の垢によごれし衣をば
解き洗へかし法のつゐでに

心の垢を洗ひ家内和合し暮してこそ人の道ともいふのである、實に前後左右が灰汁桶だらけであるがそつと除けて通る人が多い、彼の淨瑠璃でさへ灰汁桶の文句があ

る、太閤記十段目の文句に、

御諫め申した其の時に思ひ止まつて給はらば斯うした歎きはあるまいに

といふので、今は世間に此の十段目の文句が多い、或は番頭手代丁稚まで親請人がお諫め申した其の時に思ひ止まつて給はらば斯うした暇は出まいもの、又息子でも兩親伯父叔母親類達がお諫め申した其の時に思ひ止まつて給はらば斯うした廢嫡は請けまいもの、又は嫁でも里の兩親兄姉や媒人までが口を揃へお諫め申した其の時に思ひ止まつて給はらば斯うした三行り半は取るまいにと世に武智の餘類が澤山ある慎まなければならない、其の武智の餘類を見ても心の垢を洗はふとはせず、灰汁桶見ても蛙の面へ水かけた樣に知らぬ顔して居る横着者が多い、又あまり垢が積もつて泥まぶれの樣になつて居る者は、すれ合ふても穢れる、其の樣な大垢は世界の人の難義する事故、大垢大汚れは身動きもならぬ樣嚴しい灰汁桶へ入れらるゝ事もある。

身の垢や衣類の垢は終落ちもし様が心の垢は落ち悪い、是れも少しの汚れの内に摘み洗ひでもすれば落ちも仕やうが大汚れは解き分けなければならぬ、そうなつては大變なものとなる。

故に心の行方は如何様にならうも知れず、只々戰々恐々と其の獨を慎み心を學ぶ時は大垢は溜らぬもので、皆心の掃除が行き届かぬからの事である、唯日に新に掃除して洗ひ、日々に新に掃除し洗ひ、亦日々に掃除し洗ひ新なれば生涯垢氣の溜る氣遣ひはあるまい、又生れながら垢氣のないはよけれど、それは聖賢以上の事故甚だ毫い、何れ少々の汚れは心學の洗張り本心の湯のしにかけて仕立直せば大抵は人中へ出らるゝ位には成るもの故、兎にも角にも聖賢心法の敎へによつて本心の片端しでも辨へ心の洗張りをなしたきものと希ふのみ。

同情の涙

昔東國に相應に暮して居つた百姓がありました、夫婦の中に娘一人其の外召使の下男下女が五六人で、その娘が十三歳になりました時母親が不圖風の心地と打ち臥しましたが僅か五七日で相果てました、あとは父親と娘ばかりで親類が村内から後妻を入れよと勸めますけれども、彼の父親の了簡では後妻を迎へて自然繼子繼母の中が睦まじく行かぬ時は自分も苦勞し娘も亦不便である、何卒此の儘で娘の成人を待たんとて、餘程辛抱はして見られたけれども、何分娘の年はゆかず、家内の取締りをして呉れるものがないと奉公人が使ひにくい、據なく彼此と聞合はせた處幸近村に相應の人があつてこれを迎へ取り、家内の世話をして貰ひました、その後妻は甚深切に娘を養育する、娘も亦母様々々といつて慕ひます、ソコデ父親も大いに安堵し月日を送ります中に彼の

後妻が懐妊を致して程なく一人の男子を生みました、父親は喜びの中にまた氣にかゝる事も出來て、後妻が生みの子を可愛がつて先妻の娘をにくむやうに成つたなら困りごとぢやと案じ煩らつて居ましたが案じるより生むが易いと實子が出來て後も益〻繼子娘を可愛がる、中々分け隔ては見えません、是で父親も大きに喜び親子四人が睦まじく明し暮して娘は十七歳男子は三歳になりました、或夜の寢ものがたりに父親のいふに、

「お前が來た時はまだ娘は十三何も辨もなかつたが早十七になつた、今は牛にも馬にもふまれるきづかひはなく依つて思ふに何卒善い聟を貰つて此の家を讓り、此方等夫婦はこの小兒を連れて新宅でも構へ心易く世を送らうと思ふがお前は何と思ふか」乃で女房が、

「それは何よりあり難い事、私は早く隱居して世事の世話が助かりたい、何卒早く聟を貰はれませ」と機嫌よく承知しました、父は大に安心して夫より一月ばかり經て後用事で一夜泊りに他所へ參りました、其の夜は何時もの通り繼母も娘も召使も夫々のよなべ仕事、寢る時分から田舍のことゝて下男も下女も何處へやらこそ〳〵と出て行く、跡に母親は小兒を添乳して寢る娘も部屋へ入つて寢る、夜は深々と更け渡り七ツ前と思ふころ彼の繼母が寢所からそつと抜け出て其處らにある襷を取つて娘の部屋へ忍び込み、よく寢入つて居る娘の首へその襷を卷きつけ力にまかせて締め殺さうとしました、思ひがけなき事故娘は驚きさま襷に左右の手をかけて締めさせまいとする、母親は乘りかゝつて締め殺さうとする、行燈は消えて眞暗がり、母親も聲を立てず娘も驚いて聲も出ず、狼の喰ひあふ樣に暗がりで上になり下になり掴合ひましたがとう〳〵母親が娘のたぶさがみを掴んで裏の方へ引きずつて出る隣遠き田舍のこと折節其の夜は眞のやみ半町ばかり引きずつて出たが側にある野中の井戸へ彼の娘を投げ込まうとする、娘は井戸へ入れられまいと母親に取りつくを踏み倒しかいつかんで井戸の中へ難なく打ち込み、跡をも見ずして母親は家に歸

り其處ら取りかたづけ何氣なき體で小兒の添乳をして寢入つたが、恐ろしいのは繼母の振舞である、四年此方中のよかつた繼子繼母忽ち手の裏を返すやうに毒惡な繼母の仕方此の恐ろしい心は何處から來たか、考ると各自の腹の中にも此のやうな鬼が住んで居やうも知れません、折々立ちかへつて腹の中を吟味せぬと思ひの外に鬼の卵が張りついてあらうも知れぬ、油斷は一切なりません、此の繼母が嫁入りして來る時先方へ行つたら繼子娘を憎んで締め殺さうといふ分別をして嫁入りして來たものではない、サア何ういふ處から此の心が出て參りましたか、四年の辛抱たつた一夜の寢ものがたりに娘に聟を取つて家を讓らうといつた主人の一言で此の恐ろしい心になつたのであります、何故なれば夫のある間はたとへ新宅を構へても聟や娘が大事にもしようが若し目をふさいだら娘は先妻の子なり聟は近ごろの人なり我が身は後妻のことなり小さい者はあるし必ず聟や娘に追ひ廻はされて口をしい日を送るであらう、然ればとて聟取る事はよしになさいといへば繼子娘を憎むやうで夫への

の聞えもわるし、何卒我が生みの子に跡を取らせ夫はなくとも寵將軍で威勢ばりおのれが儘に暮したいと此の三十日夜も晝も寢ても醒めても念々こゝにあつて忘れられず遂に恐ろしい志になつて今娘を殺したのである、是全く己が身の身贔負より贔負の引倒しといふものになつて飛んで火に入る夏の虫己が身よりぞ火を出したのである。

年を經てうき世の橋を見かへれば
さてもあやふくわたりつるかな

扨彼の娘は罪なくして繼母の手にかゝり井戸の中へ投げ込まれたれば所詮助かるべき道はない、さてこゝがあり難いもので惡い事をせぬお蔭で不思議にこの娘の命は助かりました、其の故は始め井戸へ打ち込まれた時幸に倒に落ちないで其の儘浮くと忽ち井戸側へ手をかけて水を飲まぬ用心しあがらうともがけども中々上られず聲をかぎりに助けて呉れよと叫びました、折節夜あけ前に隣家の人が早く起き出で

田を見廻りに出かけました所が何處やら女の聲がする、不思議に思ふて聲をしるべにうかゞひますれば井戸の底ぢや、さては井戸はまりと心得さま〳〵にして引上げて見れば見知りある隣の娘、何故ぞと問ふまもなく彼の娘は上ると其の儘氣絶致しました、夫れから大騒ぎになり近所へ知らせ内へ知らす。

繼母はびつくりしたが息が絶へてあると聞いて少しはおちつき何くはぬ顔で夜前から見えませず夫は留守なり忍び男の方へでも參つたのかと心づかひに存じましたがこれは思ひよらぬことが出來ました。

と人前作つてなき〳〵いへば近所の人も氣の毒がり先づ家へ死骸をかき込み、醫者よ鍼たてよと立ち騒ぎ親類も追々寄つて來る、夫の方へも飛脚をたてる、氣つけなどいろ〳〵用ゐあたゝめまするとと彼の娘が息を吹き出しました、さては人心地が付いたかとみな〳〵よつて介抱する中やう〳〵氣が確かになり親類隣家の人は大に喜ぶゝ臺所で、

繼母は茶の下を焚きながら蘇生したと聞いて胸を冷し、駈け出さうか井戸へ飛び込まうか何うしたら可からうかと胸は早やがねをつく如く惡のむくひは早いもの

||天網恢々疎にして洩らさず||

といふて天の網は至極ゆるやかなやうなれども中々洩らすものではございません、因果は歴然用心をせなければなりません。

扨親類中は彼の娘を中に取りまき何ういふ譯で井戸の中へ陷つたのであるぞと口々に問へば娘は溜め息をついて「夕は何時もの通り夜なべをして其のうち寢入りましたが何かは知らずこはい夢を見まして是はと思つて目がさめたれば井戸の中へ落ちて居りました、それから助けて下されといつた事は覺えて居ますが其の跡は何う成つたか覺えませぬ」といへば親類中がそのこはい夢は何のやうな夢であつたか其の譯をいへといふ、娘は

「たゞこはい夢であつたとばかり繼母とも何うしたとも更にいはず唯こはい夢でと

のみいつて居ります」乃で親類中も譯がわからず大方狐狸のわざであらう、先づ怪我がなくて重疊ちやと家々に歸ります、母親も娘が譯をいはぬを幸押しつよく、

「何んな夢を見やつたのぢや定めてこはかつたであらう」と是も表向きの口上ばかり其の内に父親も戻りまして是も譯が知れねば狐狸のわざにして何事なく此の一件がをさまりましたが唯繼母は明けても暮れても底きみ惡く覺えまする、然れども娘は敢へて色にも出しません、何と孝行な娘ではございませんか、誰でも日頃氣質を隱して居りますけれども事に當つて毒蛇がはねまはるのでございます、是だからお互に平生腹の中を奇麗に掃除して若し毒蛇が居つたら早く退治して仕舞はなければなりません、然うせぬと折々頭を出しますこはい毒蛇でございます。

扨彼の娘はこれ程の苦しい目に遇つても更に色目にも出しません、繼母は固よりこれが知れては身の上の一大事だによつておくびにも尙出さず、父親は何も知らず親類は譯がわからず何うしても知れまする樣がございませんが恐はいもので、

――隱れたるより見はるゝはなし――

と誰いふともなく村中でうす〳〵と評判がある、彼の娘の井戸へはまつたのは繼母のしわざぢやと此處でもいひ彼處でもいふ、是が遂に番人の耳に入り次第にお役人樣のお聞に入つて彼の繼母が召し捕りになりました。

扨彼の繼母がだん〳〵御吟味に逢ひまして悉く白狀致しました、全く我が生みの子に家を繼がせんといふ心から先妻の娘を締め殺さうと致したる始末、井戸へ打ち込んだ事殘らず訊問にかゝつて一々申しました。

乃で早速彼の娘をお召しになつて其の始末をお尋ねになりました、所が娘は何も申しませず。

「唯その夜は恐はい夢を見ましたと思ふたばかり、井戸へ入つたのも上つたのもすべて覺えませぬ」といふお役人樣方もそれでは濟まぬ、正しく繼母が締め殺さうと致し又井戸へ投げ込んだではないかとお尋ねなさる「否々左樣な事は決してござい

ません、母は常に私を可愛がつて呉れまして中々左様な恐ろしい事がありそうなことではございません」といふ。

乃でお役人様の仰せには「継母が既に白狀に及んだれば今更かくしも詮なきこと有體に申せ」とすかしたり叱つたりなされてさま〳〵にお尋ねなさる、然れども「一向存じませぬとばかり、定めて夫はあなた方が恐はい顔をなさるゝ故恐れて母が左様に申しましたか、一切私に於ては覺えませぬ」といふ幾度お尋ねなされても唯夢ぢやとばかりいつて居る、是れは是れ正しく娘のいふ所いつはりに相違なけれども「子は父の爲めにかくす」といふ眞實の孝心親を思ふ誠より僞つていふ所なればお役人様方も如何ともなされやうがない、然るによつて遂に御評定 決着 してこれ程の大騒ぎが手がるくすみました、先づ継母はお叱りの上居村拂ひに成りました、又娘はお叱りにてすみました、此の娘は世に類まれなる孝子でございますれば急度御褒美を下されたい思召なれども此の娘が孝行ものになると母親の罪が重くなる、

それで御褒美にかへられ娘をお叱りなされたのである、此の時お立會のお役人様が娘をお叱りの節は御落涙なされぬはなかつたさうでございます、又此の話を傳へ聞くものも皆涙にむせびました、此の落涙は金品の御褒美よりも實に貴き神明の大賞與ではありませんか。

是で篤と御合點なされませ、身贔負身勝手といふものは我が身の爲めによい事ぢやと多くの人が思つて居らるゝがこれは大なる心得違ひで、古人の謂はれたる「人慾の私にて」鬼とも大蛇ともなりて身を害ひ人を損ふ惡魔であります速に退治なさるが肝要でございます。

世の中を四尺五寸となしにけり
　　五尺のからだおきどころなし
世の中は何もいはずにいよすだれ
　　そのよしあしは人に見えすく

扨此の話を聞いて世間の人々特に御婦人方は如何に思ひませうか、女の男に優る點は情の力であります、此の情これが婦女の生命であります、情の力こそ人生を飾る所の花である、人生には一日も此の花がなくてはなりませぬ、それは御婦人方の麗はしき容貌や風姿ではありません、同情の涙慈悲の心であります、同情の涙を以て事に當ればやがて花咲く時にも遇ふのであります、對手が無慈悲だからとて此方も無慈悲の心を起すのは大慈大悲ではありません。

女子の本分

昔中澤道二先生と申すお方が攝州池田へ道話に參られた時ある豪家に逗留いたした所がその家の主人固より心學熱心ゆゑ先生をもてなしのあまり十四五になる娘を呼出し道二先生を饗應せられました、此の娘御きりやうもすぐれ行儀もよく花をいけ茶を立て琴ふしらべ又先生をなぐさめ歌などをよまれました、乃で先生その親達へ

挨拶に「之ほどにお育てなさるゝはなみ〳〵の事ではございますまい」と申されました、されば親達が圖にのり「嫁入りして先方で恥をかきませぬやうにと只今致した外に裁縫は勿論松明花むすびや繪も少しは習はせました」と段々と娘自慢、乃で先生が「それは中々大抵の事ではございますまい夫なれば定め肩腰を揉む按摩の稽古をもお仕込みなされたでありませう」といはれました所が主人はムッとした顔つきで、

「貧乏はいたして居りますけれども娘に按摩の稽古はまだ習はせません」といはれました乃で道二先生ニコ〳〵笑ひながら、

「それは近ごろお心得違ひでございませう貧乏金持ちによらず女は夫の家にかしづけば先方の親達を我が親として事へるのが道で、その大切なる舅姑御が御病氣の

時繪書き花結び茶や花では御介抱は出來ません出入りの按摩やおなご衆の手をからず、嫁御がお父さん肩を揉みませうお母さん腰を撫でさすりませうとて御介抱なさるゝが嫁御の道でございます、其の道の修業に按摩のお稽古はまだかと申したのでございます、兎角役に立つお稽古が肝要ぢや」といはれました。

成程先生のいはるゝ通り役に立つお稽古只今ならば裁縫や料理のお稽古が最も必要でございませう、芋料理大根料理豆腐料理など兎角安物にて甘く拵へるのが上手であなかち高價の物を求むるに及びません、却つて安價の物で甘く拵へれば誰でも歡迎いたします。

扨道二先生のお話しで流石の娘自慢の主人も大きに我を折り赤面してお詫びを申されたといふことであります、成程琴三味線も宜しいが撫でさすりの介抱を心がけるが子たるものゝ道である、兎角娘の子に琴三味線や歌踊を稽古させて藝者の風俗を見習はす爲め、親の目をぬすんで逃げたり隱れたりが多くございます、これは娘御の惡いのぢやない親御の育ての惡いのであります、何卒可愛い娘御をお持ちになるお方々は先づ以て女子の本分をしかと心得させるごとが肝要でございます、女子の本分とは一家の經濟を取り締り舅姑に孝養を盡し夫に對して貞淑の德をいたし子女を敎へ育つる等でございます。

順の道

或る田舍の家で嫁を貰つた、其の嫁根から大それた女ではなく嫁入りして來た時には姑の前へ手ゞ突いて「何にも存じませぬ不束者の妾足らぬ所は何卒仰しやつてお可愛がり下されませ」と我が身を引き下げ順の道を守つてをつた乃で姑も身に立ち返つて「否々妾もこんなに年は老る愚痴にはなるで何うせ若い人の厄介勝ちぢや何卒面倒

を見て下され頼みますよ」と挨拶した乃で最初は嫁姑何方の胸にも我れが我れが
の鬼がゐないから互に睦じいもの

――兩鏡相對して影像なし――

で正に生佛の寄合である、此の嫁姑のみではない夫婦の中もその通りで何んな喧嘩好きの夫婦でも婚禮の盃を掴み合つてしたのではない、女房可愛や夫大事やのたゞ一心、それを犬や猫が見て「成程人間は尊いものだ俺たちは知らない同士一緒に集まると必ず齒を剝いて唾み合ふが人間は禮儀正しく夫婦の盃嫁姑の盃をして忽ち夫婦が出來親子が出來る、實に感心なものだ俺たちは淺猿しいものだ」と羨む乃で夫婦も嫁姑も始終犬や猫に笑はれないやうに注意してゐれば可いけれど月日の經つに連れて段々愼みの心が薄くなるとつひ言葉づかひも粗末に、いひたいことをいひ、したいことをして姑が尖り聲を出して「おいこらお花や」と呼ぶと嫁も眞赤になつて「えゝ喧しい何だい」との返辭、

「喧しいの何だいのとソリヤ誰にいふ言葉ぢや」「貴方の呼び方が餘りだからさ」と競り合ふに及んで最初の言葉が皆んな嘘になつてしまふ最初何にも知らない不束者であつた嫁が急に賢くなつて「妾だつてまんざら書き習めから拾ひ擧げられた者ではない、ちやんと親里がありますよ、へん貴方に似になつて堪まるものですか」といふと姑も最初年は老る愚痴にはなるといつたことを忘れて俄に壯健になり出して、

「妾はまだ能く眼も見える足も丈夫ぢやお前に寢起きの世話は頼まぬやれ〳〵恐ろしい嫁の面つき見るのも厭ぢや」と怒鳴る。

こゝに於て前に感心した犬や猫が呆れ返つて、

「やあ〳〵初めに尊い人間だつたがこの頃はわん〳〵の歪み合ひをやり出したぞ、もう俺たちの仲間へ入つたのだ」と酷評する。

これを足上頭下といつて大道を鯱鉾立ちして歩くのであるから何れ碌なことのあら

う譯はない、扨彼の嫁は日を逐ふて邪慳になる姑は益々愚痴になつて日々毎日朝から晩まで喧嘩の仕通し、する中に姑は盲人になつた盲人になると疑ひ深くなつて嫁が默つて仕事でもしてゐると、

「復た晝寢か」と呟く物音を聞きつけると「それ摺鉢を壞したのぢやろ」と罵る嫁も憂憎をつかして「えゝ喧しい婆さんだ早くくたばれば可いのに長命にも程がある」とひどいことを口走る、眞ならば盲目の姑嘸不自由なことであらうと何から何まで心を盡し順の道を勤め貫かなければならないのである、然るに姑の目の見えぬを幸ひ無禮な振舞をするといふのは卽ち天地をひつくりかへした相で追つけ殃の起る因であるがこれを辨へること早く辨へなかつた爲めにつひ大變なことが出來した。

その仔細は或る夏明日は田植ゑといふ其の日の晩に嫁が麥を搗いて翌朝莚へ展げ炎天に干して置いて家内中田圃へ行つた、殘つたのは姑一人限り所へ俄に夕立が降つて來たので姑は麥を濡しては大變と叶はぬ身ながら手探り足探り庭へ這ひ出し莚の端を持つて家へ引き込まうとかかつた、何分目は見えない足は利かない麥の溢れるのも知らずに一生懸命莚を引張つてゐるそこへ嫁が駈けて來て當りまへならば禮の一つもいふべきであるのに却つて腹を立て、

「えゝ盲の癖に餘計なお世話をするもんだ、それ〳〵麥が溢れるぢやないか、妾がするから貴方はひつこんでるが可いや」といひざま臂で姑を突き倒し見返へりもせず麥を取り入れて扨庭へ出て見ると姑はばつたり倒れた儘起きも上らず目を廻してゐる、嫁の突いた臂鐵砲が哀れ末期の手向けとなつたのである。乃で近所の人が騷ぎ出して亭主を呼ぶやら醫者を迎へるやら水の藥のと上を下へとひつくりかへしたが諺にいふ。

――後の祭り――

でその效もなく姑は終に歸らぬ人であつた。

嫁のこの所爲これを過ちとはいはれない、何故ならば所謂一朝一夕の故に非ずで平生の無禮不孝の追々重なつてこの通りになつたのである。何と恐ろしいものではないか。

乃で近所では何分大切なことであるからまあ急病で死んだといふことにして一時何事もなく濟したが、

||天に口なし人をしていはしむ||

とやら誰いふとなく「あれは嫁が殺したのだ〳〵……」と彼方でもひそ〳〵此方でもひそ〳〵これ人間がいふのではない天理を曲げてゐるから天が人にいはせるのである。

その上このひそ〳〵話が却つて善く聞えるといふのは大聲出していふことでは人がうつかりしてゐるけれど低聲で囁くことは耳を立て氣をつけて聞くからで又人に聞かせぬやうにそ〳〵と低聲でいふことに碌なことはない、乃で

||人間の囁言は天の聞くこと雷の如し||

といつて嫁の惡事は何時しか役人の耳へも入つて五年目にお召捕になりそれ〳〵吟味があると嫁は忽ち白狀に及ぶ、親殺しの大罪人とあつて三日間城下で曝された上にその村で磔に行はれたが嫁の年は時に三十五歳であつたといふ、哀れといふも悲なりである。

次に夫これも亦嫁の惡事を隱して置いた科によつて獄門にかゝつた年は四十三何と恐ろしいことではないか。

然らばこの恐ろしい殃は元來何處から出て來たことか積不善の家には必ず餘殃ありで平生腹の中にある我が我がの心から造り上げた所謂造地獄である、であるから人も吾も心學の敎へによつて本來の我が心を辨へ、年頃日頃我が我がに凝り固まつた堅い氷を打ち碎き、何にも知らない元の赤子の淸い心に立ち歸り、主人大事親大事の一心不亂順の道を守らなければならぬのである。

我儘堪忍

堪　忍

江戸牛込邊に住んだ藤村某といふ人至つて篤實な人と爲りで、平生は物も聲高には得いはない程の人であつたが、彼の中澤道二翁に就いて心學を修め尤もその身兩親にも早く別れ他に兄弟といふはなし、道二翁を師とも親とも兄弟とも賴んで萬事翁の敎へを受けた上で其の通りを勤めるといふ風卽ちこれ

――事に疾くして言に愼み有道に就いて正すを學を好むといふべきのみ――

といふ聖語の場である、斯くて其の年五十四五病氣の爲め終にはかなくなるといふ前家內の者に遺言して、

「自分此の度の病氣は快氣の程も覺束なく思ふけれども、道二先生の敎へによつて

誠の道へ入り一生を安樂に送つたことのあり難さ、其の上生死の事にも露疑ひがないから今死ぬとなつても些か心にかゝる所はない、これ偏に先生のお蔭だ、就いては自分の死んだ後は道二先生を師とも親とも又自分とも思つて家事萬端一々道二先生へ御相談申して其のお差圖通りにするやう、自分の考へを用ゐてはなりませぬぞ」といひ聞かせて靜かに息を引き取つた。

後に殘つたのは女房に娘二人姉娘には養子も出來跡目相續しつくりと暮して行くが何うしたことか妹娘は緣が遠くて到頭二十七歲となつた、時に或る方から娶ひがかゝつた、先方には舅姑もあり、小舅小姑もある上に繼子が三人といふのであるから先づは相談が難かしさう、然れど母親のいふには「最早年長けた娘だから花嫁とも出られまい、所望に任せてやるとしやう、お前も嫁くが可い」と內輪の相談も略ぼ決まつた所で娘をつれて道二翁の許へ相談に行つた。

翁は一通りの話を聞いて「成程世間並でいふと大分難かしい家のやうぢやが其處は

娘御の心一つで善くもなれば惡くもなる、おやりなさるが可からう、何は左もあれ大切なのは娘御の心得方ぢや、娘御は何んな心得で嫁きなさるのかそれをいつて御覽」とのことに娘は些と面はゆげに手を突いて、

「たゞ今これといふ考へもございませんが先づ先方へ參りましたならば舅姑には隨分孝行を盡しませうし、小舅小姑には信實を以て交際ひ、又三人の繼子は充分可愛がつてやる心組でございまする」と無理のない返辭をした。

すると翁は娘の顏をじつと睨んで「それは以ての外の心得ぢや、そんな心得では此の緣長久は難かしい、これ阿母娘御をやることは見合せなされ」といふ、此方二人はびつくりして、

「それなら如何心得るのでございませう」

「然やうさそれをいつて聞かせるのはいと易いことぢやが此處は娘御の一大事の塲ぢや、つひ一通り聞いた分のことではなか〳〵間に合はぬによつて家へ歸つてまあ

篤と考へて見られるが可い、阿母も共々考へておやりなさい」とのことに、

「では重ねて御相談に參りまする」

「それが可い、決定が出來たら今一度娘御をつれてござれ」といふやうなことで母子は空しく引き收つたが、二三日すると最早考へがついたのか母親は娘共々道二翁を訪ねて、

「この程申し上げました娘の心得方は甚だ宜しくないとのことでございましたが成程その理由が解つたやうなと娘も申しますので今日連れて參りました、何卒今一度お聞きなされて下されませ」といふ。

翁は頷いて「それは仕構、では娘御お前の了簡をいつて御覽」娘は手を突いて、

「この間申し上げましたやうに舅姑に孝行を致しませうの、小舅小姑には親切を盡し、三人の繼子を可愛がりませうの、と申すと何か妾の心に隔てがあつて、しなくても可いことを據なくするやうに聞えまする、それ故惡いと仰しやつたのでは

あるまいかと夜前も阿母さんと申したことでございます、でその了簡は止めましてたゞ〳〵鼻姑は妾の實の阿父さん阿母さん、小鼻小姑は實の兄弟、三人の繼子も繼子とは思はず自分の身腹を破つた實の子と存じて別け隔てなく致す心得如何なものでございませう」

と實に道理な言葉である、所が翁は大きに立腹して「それは又言語同斷な惡い了簡ぢや、女の身としてそんな利口な了簡を持つて居られては何處へ嫁入りせられても尻の据る時はござらぬ、此の間の心得よりも一段と惡くなつた、鼻姑を實の親と思ふの、小鼻小姑を實の兄弟繼子を我が生みの子と思ふのとそれは皆な當座の出來合了簡で何れ末の届かぬことぢや、これ阿母何うでもこの緣談は止めにするが可い娘御のあの了簡では到底長久は難かしい」ときつぱりした言葉である。

母子は殆んど膽を潰して暫くはいふべき言葉もなかつたが稍あつて涙を流し「さて〳〵御親切の段あり難う存じまする、けれど此の上は到底妾共の了簡には及びませ

ぬ、何卒先生のお示しを願ひまする」と折り入つて賴むと翁は莞爾として「いや道理なことぢや、ではその心得方を今お聞かせ申さう、これ娘御近う寄つて篤と聞かつしやれ」

「さてお前のいはるゝ所一應は道理のやうぢやがそれは世間並のありふれた了簡ぢやによつて今度の嫁入りの間には合はぬ、それ故故意とあんなに嚴しくいつて工夫をさせたのぢや、然しまあ〳〵あれ程に考へをつけられた段は大きに感心致す、扨一大事の覺悟とは他ではない、堪忍の二字である、今度先方へ嫁入りをせられるのはたゞ堪忍の行ひを勤めに行くのぢやと然やうに覺悟をなさるが可い、その理由は其方も今年で二十七年親の家風に馴染んだ娘ぢや、俄に他人の家へ入れば心に適はぬこともの多く辛いことはあり勝で何れ長の月日には湯殿の隅や雪隱の壁へ向つて泣くやうなことも度々あるであらう、そんな場合其方の胸に何か孝行らしいもの信實らしいものを持ち合せてござると、俺があれ程にするものを阿母さんは聞えませぬとか

俺がこれ程に思つて居るのに小姑がそでないとか、何れ向ふを怨む心が出るに相違はない、然うした心が出たが最後それが修羅道の根となつて終には縁の切れ小口、一生流浪をせにやならぬ、そんな孝行ぢや信實ぢやのといふ了簡はまあさつぱりと除けて置いて、辛いことのある度毎にこゝが大事の辛抱どころ、此の堪忍を勤めにこそ俺はこの家へ嫁入つて來たのぢやと唯一筋に堪忍の行ひを勤めるが可い、それが眞の活きた孝行活きた信實といふもので、それが出來さへすれば天下に敵なし千秋萬歳の榮えがあつて此の縁めでたく行くのである」と諄々としていふ道二翁の言葉に母子とも涙を流して、

「さてもさても」と感心して家へ歸り娘も其の心得で先方へ嫁たのであるから夫婦の中はいふに及ばず、舅姑とも睦じく、小舅小姑との交際圓く治まり、三人の繼子も實子のやうに懷き慕へば家内に少しの物いひもなく〳〵に暮しをすること

が出來た。

斯くて三十幾年かを經る中舅姑も追々世を去り、夫をも見送り、又小舅小姑もそれ〴〵に縁づいて而も相變らず親切にし合ひ、三人の子供は總領へは嫁を娶り、その他は他家へ養子にやつたのもあれば嫁に出したのもあるが、何れ劣らぬ孝行者で母を殊の外大切にする、それ故家は益々繁昌して母は眞の樂隱居何憂ふることもなく何することもない儘に道二翁の許へ通つて一生涯道を樂しんで幸福に暮したとのこと。

何とあり難い譯ではありませんか、たつた一つの堪忍を守り詰めた德で然うした安樂暮しが出來たのである。

――堪忍の忍といふ字を分析すれば刃の下にある心――

で常に我が心の上には刃があるぞ、身最負身勝手計りして我儘であれば自分の心に疵がつく、此處が堪へなければならない處であるのだと我慢するのである。

孝は百行の基

心の持ち方

例の賣卜先生の處へ或日眞面目らしい男が參りまして、

私は用事あつて、明日旅行をしたいのですが一つ吉凶を觀て戴きとう御座いますと申しました。

翁は無雜作に…晴天ならば吉、雨天なれば凶、曇天牛吉、若し急用ならば雨天でも立て、船舶は危險なれども日和を見て曆を見ず…と客は合點のいつた顏付きで、

私はお言葉通りで氣が濟みますが、兩親は至つて御幣擔ぎで少しの事にも心配を致します。

殊に私は土に生れた子だからと親たちは氣づかつて種々さま〴〵の呪ひ事土に生れ

た子は必ず短命だとか申しますがそんなことがあるものでせうか」

「翁はこれまで土に生れたといふ人で五十の坂を越した者を約そ七八人も見た、又七十近い人にも逢つた、反對に土でない日に生れた人の短命なものも度々見る事ぢや、ぢやによつてそんな事翁は一切信じぬ、若し土に生れる子が必ず短命といふことなら短命な子はすべて土に生れべきぢやとしたら持つて生れた短命ではないか、持つて生れた短命呪ひ位で長命は覺束ない……」と一笑する。

「私も然やうに思ひますれど親たちは飛んだ心配で方々へ願を立て八日と十二日は藥師の日だ、蛸と虎とを食うな、惠比壽の日は鯛はならぬ、毘沙門の日に百足を忘れるな、何の日は何處の朝參り、何の日は其處のお百度、香水でも呪ひでも聞きつけ次第御幣を擔ぎ廻すので近所の人は大笑ひ、朋友の中には馬鹿めと叱る者もございます、叱らば叱れ笑はゞ笑へ兩親の言葉に任せて明日の旅立ちも實は願詣なので」

と赤い顔をする、茲に至つて翁は膝を直して、

「古語に

――父母在す時はその志を見る父母歿する時はその行を見る――

とあつて親ある人の行ひはその行ひのみを見て左右の評判は出來ぬ、その志を見てその孝を知る、其許の志翁は大に恥ぢ入り申す、扨旅へ持つて行くのによい護符がある、餞別として進上致す、孝の一字ぢや、この一字を懷中して忘れなければ唐天竺何處如何なるところへ行つても怪我過ちはあるまいぞ」と

「次は……」

「妾たつた一人の伴に別れまして忘れやうと思つても忘れることが出來ません忘れる工夫がありましたらお授けを願ひます」と母なる女が涙ながらにいふ。

翁は氣の毒げに頷いて「子故に主人親を忘れまいぞ、父母の爲めに妻子を忘れるのは孝子の常で、君の爲めに父母を忘れるのは忠臣の常ぢやけれど太平の御代に彰

はれぬ、近くは四十七士を見られよ、君の爲めに妻子を忘れ、父母を忘れたよい手本ぢや、遠くは我國の書物を見て知るが可い、扨又父母の爲めに天下を忘れた大舜を初めとして妻子を忘れその身を忘れた孝子は和漢共にその例は數多ある、それ等に並ぶ話ではないがこれは翁の舊里でのこと」

といつて一人の孝子を紹介する、

以前は處の屈指の某、盛衰浮沈は世の習ひとて後には家道次第に衰へ、小女郎一人使つて朝夕の烟も細々と暮した、娘があつて名はお豐その十二歳の時母が病氣になつて食事が喉へ通らない、お豐は晝夜母の側を離れず寢食を忘れての介抱振り、大人も恥づかしい程である。

一夜夜の更けるのも打ち忘れ母の背を撫で足を擦つてゐると母は細い目を見開いて

「妾が御飯を食べないのは何時もの持病だ、二三日もしたら癒るだらう、何も心配することはない、夜も更けて嘸睡いだらうに、可いから寢んでお呉れ、そして明朝

早く起きて蜜柑を一つ調へて欲しい、蜜柑の露が少しあつたら食事も進むだらうけれど蜜柑はまだ色づくまい、買うわけには行かないが何うして求めたものかね」と心配さうにいつて何時しか眠入つてしまつた。

朝になるとお豐は後先の考へもなく心覺えの、蜜柑畑十町餘りもある處へ怖さ寒さも打ち忘れてほのぼの明けに辿りつき三つ四つ盜み取つて懷へ入れた、すると忽ち番人に目つかつて、

「貢もまだ濟まない中人の蜜柑に手をかけるとは太い女だ、盜人だ、汝れ容赦がなるものか、村の掟通りにして呉れるぞ」と怒鳴りつけ泣くも詫びるもきかばこそ繩をかけて引つ立てゝ行く、所がその畑主はお豐の容儀の賤しからぬこと、言譯の健氣なのに感心して、

「それは氣の毒なこと、けれどお前の孝行が徹つて母御の病氣も今に本復するぢやらう、折角大切にしたが可い」などゝ種々いひ慰め自身某方へ送り届けた、病人はその蜜柑のお蔭で食事も進み日ならず全快したとのこと。

その後翁はお豐に向つて其方が蜜柑を盜んだこと、親の爲めの盜みなら盜みも孝行ぢやと思つて盜んだのかと尋ねて見た、するとお豐は涙ぐんでその時は孝行といふことも盜みといふことも忘れてたゝ蜜柑が欲しいばかりでございました、と答へたが左右の論は姑く措き、これなども母の爲めにその身を忘れたものといひ得やうか」

「その次は誰ぢや」

「拙者近來左右物忘れをして困り入る、忘れまいとして指を括るとその指をも忘れてしまふ、何かの祟りではあるまいか、御判斷をお賴み申す」翁莞爾として、

「蛙は蚯蚓を見て蛇のあることを忘れ、蛇は蛙を見て猪のあることを忘れ、猪は蛇を見て獵人のあることを忘れ、獵人は猪を見て山の險しいことを忘れる、これ等はその身を養はうとして却つてその身を忘れるのぢや、己れの家業でもなければ身を

養ふ爲めでもないが、日の暮れるのも忘れて流れの中に立ち、罪も報いも冷えも痛
氣も忘れ果てゝ魚を釣る人もある、人の魚釣りをうか〳〵と見て丁稚は使ひの口上
を忘れる、使ひの口上を忘れた丁稚を性なしめと叱る手代も田舍の麥飯雜炊のこと
を忘れて此の米は不味いの古臭いの今日も亦鰯の干物かなぞと呟く、その呟くのを
聞いてあゝ何處の手代も同じことぢや田舍の貧乏暮しを忘れて二子は當世向きでな
いの、小倉の帶は腰が重いの何の彼のと文句をいふ、さて〳〵物忘れをする手代で
あると笑止がる旦那殿も先祖の辛苦艱難の恩を忘れ、己れの身欲には家の衰微する
ことも忘れ、妻子に迷つては親兄弟のことをも忘れる、天恩國恩父母の恩はいふも
更ら、人に恩を被たことは忘れてならぬことであるのに得ては忘れて退けるものぢ
や、忘れても苦しくないことは何時までも忘れず折節はいひ出して恩に被せる人も
ある、心が見えて淺猿しいことぢや、
轉宅に女房を忘れたと聞いては手を打つて笑ひ、褌をしめることを忘れて尻からげ

にしたのを見てはくつ〳〵と指さし笑ふ、その笑ふ人の中にも一朝の怒りにその身
を忘れる人もあらう、必ずその身を忘れまいぞ、不忠不孝非義非道に陷るのは皆こ
れ我身を忘れた人ではないか、客は小首を傾けて、
「先生は前には忘るべきことを說いて、後には忘るべからざることをお述べぢやが
萬事忘れて可からうか」
「否々」とかぶりをふる。
「忘るべきを忘れ、忘るべからざるを忘れずといふのか」
「未だ可ならず天道は爲すことなくして而も爲さゞることがない、堯は天下を忘れ
て能く天下を有つた、孝子は孝を忘れて孝に中り、忠臣は忠を忘れて忠に適ふ、譬
へば書を能くする者は書く毎に心を入れぬけれど規矩を離れぬ、謠ひの上手な者は
節毎に氣を留めぬけれど巧く拍子に合ふ、魚は江湖に相忘れて人は道に忘れるやう
なものぢや」

「何と得心が參つたかのう。」

修養
教訓
道話のあつまり
終

大正八年五月五日初版印刷
大正八年五月廿日初版發行

著作者　水野庫治郎

發行者　東京市小石川區竹早町百番地　米本省二

印刷者　東京市本所區相生町三丁目八番地　鈴木國松

印刷所　東京市本所區相生町三丁目八番地　岡本活版部

發行所　東京市京橋區本材木町三丁目廿番地
電話京橋二二二九振替東京一六〇九　求光閣書店

上製　正價金壹圓
並製　正價金七拾錢

不許複製

●帝室御用掛文學博士杉浦重剛先生序文醫師新家雲外先生新著

醫界の警鐘

社會に對する醫師の警告

正價八十錢
送料八錢
新形箱入製本
美麗紙數
四百二十四頁

輿論如湧

醫は元來仁術成に現代は金術で無か著者は實地醫術に從ふ事玆に卅有餘年醫學の缺陷と時醫の弊害を看破し極力仁術鼓吹に力む本書世に出病者海よりは救れ可一般世人は爲に大に警醒す可醫界の諸賢と雖も又必ず迷霧を一掃して其本分を全すべし

大阪毎日新聞曰く……本書は醫術の淵藪より説き始め先づ西洋醫の缺點を列擧し進んで醫は仁術なりと謂ふに現今の醫師の多くは此本分を忘れて眼前の利欲の爲種々卑劣なる行爲を敢てし且患者の吸收に齷齪たるが如き醫師の裏面を暴露し次で疾病と精神との關係を述べて古來の醫術に對する金言並に精神療法を示し終に著者の信仰する長生法、日心教の要旨を説けるものなるが同上は著者が開業醫として社會のため赤裸々の警告をなせるものなれば大に注意に値するものあり生ある以上必ず本書一讀の要あり

387
17

終